

Title	日本語複合動詞の語形成における「意味づけ」プロセスに関する研究
Author(s)	張, 帆
Citation	
Issue Date	2012-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/10491
Rights	
Description	Supervisor:橋本 敬, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

日本語複合動詞の語形成における「意味づけ」プロセス に関する研究

指導教員 橋本敬 教授

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識科学専攻

0950210 張 帆

審査委員：橋本 敬 教授（主査）
中森 義輝 教授
池田 満 教授
HUYNH, Nam Van 准教授

2012 年 2 月

目 次

第一章 はじめに.....	5
1. 1 背景.....	5
1. 2 研究の特徴.....	6
1. 3 研究の目的.....	6
1. 4 本研究の構成.....	7
第二章 既存研究.....	8
2. 1 重要概念の解釈.....	8
2. 1. 1 複合動詞.....	8
2. 2. 2 語形成.....	9
2. 2. 3 意味づけプロセス.....	10
2. 2 複合動詞の意味構造に関する研究.....	11
2. 3 複合動詞の意味形成に関する研究.....	16
第三章 実験のデザイン.....	20
3. 1 目的を達成する基本的考え.....	20
3. 2 予備実験.....	21
3. 2. 1 予備実験の方法.....	21
3. 2. 2 予備実験の結果.....	23
3. 2. 3 予備実験の分析.....	23
3. 2. 4 予備実験のまとめ.....	27
3. 3 本実験.....	28
3. 3. 1 本実験の改善点.....	28

3. 3. 2 本実験の方法.....	29
第四章 実験結果と分析・考察	33
4. 1 結果概観.....	33
4. 2 問い1：どんな複合動詞が作られたか？	34
4. 2. 1 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の数.....	34
4. 2. 2 既存の制約に従うかどうか	36
4. 2. 3 用いられた単純動詞の頻度	37
4. 2. 4 単純動詞のフレーム意味の頻度	40
4. 3 問い2：どんな意味がどのように付けられるか	43
4. 3. 1 構文的意味の頻度.....	43
4. 3. 2 フレーム意味から構文的意味への組み合わせ過程	45
4. 3. 3 表れなかった構文的意味の形成	48
4. 4 問い3：どういうふうに理解されるか	49
4. 4. 1 作業群と評価群による構文的意味の分布	49
4. 4. 2 「共感度」から構文的意味の理解を見る	50
4. 4. 3 先行研究における制約など既存の知見との関係.....	52
第五章 結論.....	53
5. 1 まとめ	53
5. 2 今後の課題	55
参考文献	56
謝辞	58
付録	69

目 次

図 1 語形成における複合動詞の位置づけ	9
図 2 意味づけプロセス	11
図 3 複合動詞における構文的多義ネットワーク ((野田, 2011) より引用)	18
図 4 意味づけプロセスを模擬する実験の流れ.....	21
図 5 「うもれきえる」の意味形成図	25
図 6 メタファーによる意味形成の例	27
図 7 : 単純語の前項 (V1) ・後項 (V2) の頻度.....	39
図 8 : 使用されたフレーム意味の頻度.....	43
図 9 : 構文的意味の頻度	44
図 10 「望み苦しむ」の意味形成図.....	46
図 11 「歩き苦しむ」の意味形成図	47
図 12 「転び頼る」の意味形成図	47
図 13 作業群と評価群が付けた意味の構文的意味の比較	49
図 14 意味の共感度高い複合動詞の構文的意味分布	51
図 15 意味の共感度低い複合動詞の構文的意味分布	51

目 次

表 1 他動詞調和原則（(影山, 1993, 1996) に基づいて作成）	13
表 2 複合動詞構文的意味分類表.....	19
表 3：予備実験でもちいた単純動詞	22
表 4 予備実験で実際に作業群に呈示した単純語	22
表 5：予備実験で作業群が作った複合動詞	23
表 6 予備実験で作られた複合動詞の「重ね合わせ」規則に対する分類.....	26
表 7：本実験で選んだ単純動詞（それが所属するフレームも示す）	30
表 8 本実験で作業群が用いた単純語動詞	30
表 9：本実験における新しい複合動詞.....	33
表 10：複数回作られた新しい複合動詞	33
表 11：統語的・語彙的複合動詞とその個数	35
表 12：実験に用いた単純動詞の項構造の分類.....	36
表 13：作られた複合動詞の制約に関する分類.....	37
表 14：使われた単純動詞の頻度、フレームネットによる分類、	38
表 15 カテゴリー分けした Frame ごとの単純動詞の出現頻度	40
表 16 カテゴリー分けした Frame ごとの単純動詞の出現頻度（Self_motion を除く）	40
表 17：単純動詞の使用頻度（フレーム意味による分類）	42
表 18 新しい複合動詞に適応できない構文的意味.....	44
表 19：構文的意味 4 番が付けられた複合動詞.....	45
表 20 その他の構文的意味	48
表 21 他動詞調和原則と共感度の関係	52

第一章

はじめに

1. 1 背景

現在世の中には、少なくとも六千種以上の言語が存在している (Ethnologue: Languages of the World, 2005). その中に初期から全く変化しない言語は存在しない. 各言語における言葉は使われる限り変わり続けるが, ヒトは新しい意味や使い方などを理解できる場合が多い. すなわち, 人間は新しい言葉を作る能力とその生みだされた言葉を理解できる能力の両方を持つと考えられる. この能力により, ヒトは無限に言語を生成することができる.

言語の中で動詞は人間の思考や世界理解において非常に重要な役割を演じる (Pinker, 2007). そこで, 動詞に着目することで言語を生成する能力について考察する. 日本語において, 新しい動詞概念を作り出す方策として最も頻繁に用いられるのが複合動詞¹である. 複合動詞は現代日本語に極めて多数存在し, 様々な結合パターンがあり, 意味も実に多様である. この複合動詞を作るメカニズムを明らかにすれば, 人間が無限に言葉を作り, そして理解する能力の一部が見えると考えられる.

日本語学習者にとって, 複合動詞の意味は習得が困難な語彙項目の一つだと考えられている (白, 2007). その難しさの一点は, 意味が単純動詞の原義から変化する点である. 例えば, 「振る」と「込む」の意味を知っていても, 「振り込む」の意味を類推するのが非常に困難である. この問題意識から, 日本語学習者を対象とし, 母語干渉による誤用パターンについて研究が日本語教育分野で行われている (白, 2007).

では, 母語干渉の影響がない日本語母語話者にとって, なぜ複合動詞の学習が困難だと思わないのであろうか. どのように複合動詞の意味を他人に伝えられるのか, そして, どうやって聞いた複合動詞の意味を理解することが

¹ ここでいう複合動詞とは, 「泣き叫ぶ, 書き込む」のように前の動詞 (前項動詞, 以下 V1 と称する) の連用形にもう一つの動詞 (後項動詞, 以下 V2 と称する) が結合したものを指す. 詳細については, 第二章で紹介する.

できるのであろうか。

そこで、本研究では、人間が無限に言葉を作り、そして理解する能力を発揮するときに、人間が持つ新しい言葉を作る能力とその生みだされた言葉を理解できる能力はどのように機能するのかを知るため、日本語母語話者が新しい複合動詞を作る仕組みに着目した。

1. 2 研究の特徴

深谷・田中（1996）は「言語を扱う研究者にとっては、最も難しいのは、日々当たり前のように繰り広げられるコトバのやり取りをあるがままに描き出していくところである」と述べた。なぜなら、言語の研究は、言語について言語を使って語るしかないからなのである。

本研究の特徴は、心理学や自然科学で用いられている実験という研究方法をとるところである。ここでは、新しい複合動詞を作る過程を模倣する実験を行い、「形式」と「意味」の組み合わせを主観的に語るだけでなく、できるだけ客観的に分析を試みる。

今までの複合動詞の意味形成を対象とする研究は、既存複合動詞がどういう意味構造として理解されるかに重みを置いていた。本研究のもうひとつの特徴といえるのは、理解する側だけではなく、言葉の意味を作る側も重視し、意味づけプロセスの全体における働きを明らかにしようとするところである。

1. 3 研究の目的

本研究の目的は、新しい言葉を作ることにより、日本語複合動詞の語形成において、「意味づけ」プロセスという意味と形の結合過程を解明することである。より具体的には、以下の3つに答えることを目的とする。

- i. どのような複合動詞が作られるか
- ii. 新しい複合動詞にどのような意味がどのように付けられるか
- iii. 新しい複合動詞がどのように理解されるか

本研究で扱う意味づけというのは、日常で使うようにもともと存在する表現に状況に応じた意味を解釈することだけではなく、形式により意味が作られる、意味により形式がつくられるダイナミックなプロセスと考えている。詳細については、第二章で紹介する。

1. 4 本研究の構成

以下に本論文の構成について述べる。

第二章「既存研究」では、本研究において援用する言語学の重要概念（「語形成」や「意味づけ」など）を確認する。次に、本研究が依拠する「意味構造の観点」と「意味形成の観点」を概観する。そして、先行研究に残された問題点は何かについて述べ、その問題点を検討するための実験という方法を提案する。

第三章「実験のデザイン」では、本研究が考えた意味と形の結合過程を模擬する実験を紹介する。ここで、予備実験の材料選択や実験対象などから流れまでを述べ、得られたデータに対する分析を試みることで分析方法を考察する。このような予備的分析から、実験方法と分析の問題点を検討し、本実験に向けて解決策・修正案を提示する。そして、修正した本実験について、データの取り方や分析手法などを紹介する。

第四章「実験の結果と分析」では、本実験の結果を概観し分析する。分析は、意味づけプロセスの二段階における各問い「問い1：どのような複合動詞が作られるか」「問い2：新しい複合動詞にどのような意味がどのように付けられるか」「問い3：新しい複合動詞にどのような意味がどのように付けられる」に答える形で、データや事例を挙げながら考察していく。

最後に、第六章では、本研究のまとめと結論を述べ、これからの展望について記す。

第二章

既存研究

本章では、本研究において援用するいくつかの重要な概念（「語形成」や「意味づけ」など）について確認し、日本語複合動詞に関する先行研究を概観する。日本語複合動詞を扱う多様な研究を大きく分類すると、音声論、形態論、語彙論、統語論などに分けられる。その中で、意味に注目する各研究をさらに分類すると、以下のように3つに分けられる。

1. 意味構造の観点：複合動詞の結合条件や分類に関するテーマ
2. 意味形成の観点：意味形成の全貌に関するテーマ
3. 他の観点：母語干渉など他の言語との対照テーマ

本章で紹介するのは、「意味構造の観点」と「意味形成の観点」から言葉の意味に対する解釈についての研究である。

2. 1 重要概念の解釈

一連の先行研究を紹介する前に、本研究において使用する各概念の定義を確認しておきたい。

2. 1. 1 複合動詞

現代日本語の複合動詞（compound verb）は多様な具現形を持ち、日本語の動詞体系において重要な位置を占めている。広義的複合動詞とは、その実質的形態素の二つともが動詞であるか、あるいは後部形態素が動詞であって、形成された複合語自体が一つの動詞としての文法的性質を持つものを呼ぶ。国立国語研究所の『語彙の研究と教育』（国立国語研究所、1984）によると、複合動詞において主な結合パターンは以下になる。

I. 動詞＋動詞

呼び寄せる 聞き取る 吐き出す 飛び回る 話し合う

II. 形容詞＋動詞

近寄る 高すぎる 若返る 高鳴る

III. 名詞＋動詞

泡立つ 名づける 目指す 旅立つ 間違う 色褪せる

IV. 副詞＋動詞

ピカピカする ぼんやりする しみじみする ニコニコする

狭義的複合動詞とは、上記の I のものだけを指す。本研究で「複合動詞」として扱うのは I の[動詞 (V1) ＋動詞 (V2)]の形である。

2. 2. 2 語形成

語形成 (word-formation) または派生 (derivation) とは、異なる意味・形・品詞を持つ新しい語を作り出すことを指す。通常は 2 個の形態素を組み合わせることで 1 個の新しい語を作る。語形成と派生は、多くの場合、同義の用語として使われるが、ここでは、語形成と派生を区別する。

語形成は以下の 2 つに分けられる。

- 複合語形成 (compounding) : どちらも自由形態素 (単純語) である語形成
- 派生 (derivation) : 少なくとも一つが束縛形態素²である語形成

これらの包含関係をまとめると図 1 のようになる。本研究の対象とするのは、この全体図の中の複合動詞 (赤で示した部分) である。



図 1 語形成における複合動詞の位置づけ

² 形態素とは、意味を担う最小単位である。束縛形態素は他の形態素と結びついてしか意味を表すことができない。自由形態素は、単独で意味を表すことができる形態素 (単純語) である。例えば、「お茶」の、「お」は束縛形態素、「茶」は自由形態素である。

本研究に使用した「語形成」という用語は、基本的には派生語の作られ方や複合語の内部構成を研究する分野で、「形態論」とも呼ぶ。何が違うかというと、本研究は複合動詞全体を対象にするので、主に複合語形成を対象とし、複合語の性質を形態的構成だけではなく、文法的各側面に照らし合わせて総合的に解明しようと考えている。

2. 2. 3 意味づけプロセス

「意味づけ (sense-making)」に対する考えは研究者によって異なるが、＜質料から意味を作る＞という点をうまく言い当てた英訳「sense-making」(深谷・田中・1996) は、本稿が「意味づけ」という表現として最も近い意味合いである。本研究で考える「意味づけ」プロセスとは、形式と意味の結合だけでなく、形式により意味が作られる、意味により形式がつくられるダイナミックなプロセスである。この考えを従い、意味づけプロセスを以下のよう考える。

まず、「意味づけ」プロセスは次の二段階で構成されると想定した。

- I. 意味を組み合わせ、新たな言葉として使う
(意味により形式が作られる第一段階)
- II. 組み合わせた意味を持つ新たな言葉を理解する
(形式により意味が作られる第二段階)

それに従って、三つの問題が解決されるべきであると考えた (図 2)。

- i. どのような言葉が作られたか
- ii. どのような意味がどのように付けられるか
- iii. どのように理解されるか

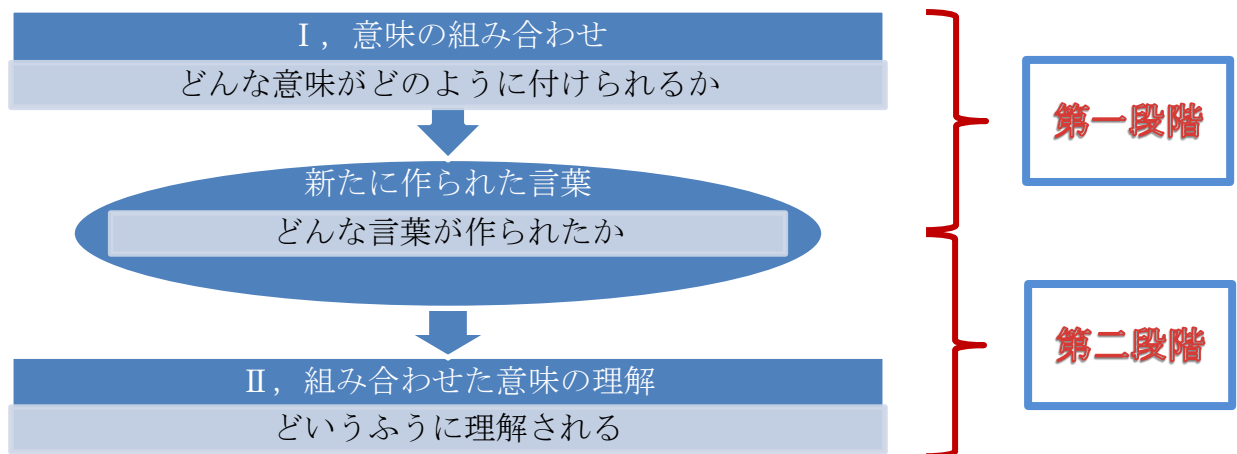


図 2 意味づけプロセス

これで、日本語における「V1+V2」型複合動詞の性質を形態的構成だけではなく、文法的各側面に照らし合わせて総合的に解明しようという考えのもとで、どんな意味がどのように付けられるか、そして、どういうふうに理解されるのかという本研究の目的を示した。ここで、研究目的を具体的に明示する。

本研究の目的は、新しい言葉を作ることにより、日本語複合動詞の語形成において、「意味づけ」プロセスという意味と形の結合過程を解明することである。より具体的には、以下の3つに答えることを目的とする。

- i. どのような複合動詞が作られるか
- ii. 新しい複合動詞にどのような意味がどのように付けられるか
- iii. 新しい複合動詞がどのように理解されるか

これから、本研究を導く各先行研究を紹介する。

2. 2 複合動詞の意味構造に関する研究

複合動詞の結合条件及び分類に関しては、語彙意味論の分野で研究が進んでいる。米山（2001）は語彙意味論を次のように説明している。

語彙意味論においては基本的に、統語構造には語（主に動詞）の意味の特性が反映されると考えられている。この背景には、生成文法において、項構造を基盤とした説明に重点が置かれるようになったという状況があり、これに伴い、動詞がどのようなタイプの項を取るか、またその項の特性は

どのようなものか、ということに関心が集まる事になったということである。そして、このような問題意識は、語の意味は概念的な要素の組み合わせから成る内部構造を持つという考え方と相まって、意味に対する語彙・概念的な見方を推し進め、このような考え方を具体化したものが語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure : 以下 LCS と呼ぶ) であり、語彙概念構造を基盤とする意味論が一般に語彙意味論 (Lexical Semantics) と呼ばれる枠組みである。(米山, 2001 : 147)

本稿では、項構造レベルにおいて複合動詞の分類について紹介する。項構造は、動詞が文法的に取る項を表示するものである。例えば、「食べる」という動詞は次のように表示される。食べる (Agent<theme>)。なお、影山(1993)は、外項を山形括弧の外側に表示し、内項を内側に表示する方法をとっている。ここで「外項」「内項」というのはそれぞれ「主語」と「目的語」に相当するものであると考える。この枠組みにおける先駆的研究として、影山の一連の研究における複合動詞の扱いについて取り上げる。

影山(1993)は、現代日本語の複合動詞に対する研究において、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」とを区別するという立場を採っている。その分類基準を簡単に言えば、「統語的複合動詞」は動詞句の埋め込み構造を持つ。例えば、

- ① 「働きすぎる」=>「働くことがすぎる」
- ② 「食べ始める」=>「食べることをはじめる」

が統語的複合動詞である。言い換えると、「統語的複合動詞」は、V1 が V2 の目的語（または主語）となる事象を表すという補文関係として捉える。一方、「語彙的複合動詞」は補文関係をとらないものを指す。

最初に、影山(1993)における語彙的複合動詞の分類について提示する。

影山は動詞の項構造における外項の存在の有無により、語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせが説明できるとしている。この規則を影山(1993)は「他動詞調和の原則」と呼ぶ。その規則を説明する前に、影山(1996)が項構造の観点から行った動詞に対する分類を紹介しておきたい。

影山(1996)は日本語動詞を非能格自動詞、非対格自動詞、他動詞の3種類に分類した。「非対格自動詞は人間の意志的作用が係わらない、自然発生的ないし自発的な出来事を、非能格自動詞は主として生物の意志的活動を表すと考えればよい」と影山(1996)が述べた。従来の日本語の自動詞・他動詞の分類に当てはめると、次のようになる。

自動詞

a. 非能格自動詞

例：子供 が 走っている.

b. 非対格自動詞

例：花瓶が 割れた.

他動詞：

例：子供 が 花瓶を 割った.

なぜなら、影山はこの 3 種類動詞それぞれの項構造を以下のように説明している．そして、x を外項（動作をする）とし、y を内項（動作を受ける）とすると、先の例を項構造の表示は以下ようになる．

意志的自動詞： 走る → (x < >)

無意志的自動詞：割れる → (< y >)

他動詞： 割れる → (x < y >)

つまり、意志的自動詞の主語は「外項」、無意志的自動詞の主語は「内項」に相当すると考えられる．それゆえ、外項をとる意志的自動詞が「非能格自動詞」、外項を取らない無意志的自動詞が「非対格自動詞」だと分けられている．

そして、「他動性調和原則」というのは、語彙的複合動詞は、外項を取る動詞（他動詞、非能格動詞）同士か外項を取らない動詞（非対格動詞）によって作られるという原則である．

これらの制約を簡単な表に表すと表 1 のようになる．その表の中に、○を付けたのは「他動詞調和原則」に合致するもの、×付けたのはこの原則に反するものを表示している．

表 1：他動詞調和原則（（影山，1993，1996）に基づいて作成）

V1 \ V2	非能格 (x < >)	非対格 (< y >)	他動詞 (x < y >)
非能格 (x < >)	○	×	○
非対格 (< y >)	×	○	×

他動詞 ($x < y$)			
--------------------	---	---	---

なお、影山の一連の研究における語彙的複合動詞と統語的複合動詞の語形成部門の相違による区別するという考え方は、由本(1996, 2005)や松本(1998)などにおいて支持されている。

松本(1998)はこれを受けて、語彙的複合動詞における構成要素の組み合わせは、二つの動詞、即ち V1 と V2 の主語が同じでなければならないという「主語一致原則」を提案した。しかし、中国語では「打ち殺す」が「打死」と表現されることから分かるように、この原則は言語普遍的なものではなく、日本語の複合動詞の特徴であるといえる。

但し、影山、松本はいずれも、適用できない例外としての語彙的複合動詞の存在を指摘している。そして、影山(1996)と由本(1996)は「この原則を踏まえた上で、さらに詳しく個々の複合動詞の意味構造を明らかにしていくことが必要になる」と指摘した。由本(2005)は、語彙的複合動詞における動詞の組み合わせの制限は二つの動詞の LCS の合成が適切な動詞概念を形成するための意味的制約として説明できるものとしている。

影山(1999)によれば、LCS (語彙概念構造) とは、統合構造との対応を重視して作られた意味構造であり、一種の論理式を用いる。その論理式は、抽象的な述語 (BE, CAUSE, BECOME など) と名詞 (項) で一定のスキーマに従って成り立つ。動詞の LCS を次の枠組みによって表示する。

$[x \text{ ACT}(-\text{ON } y)]\text{CAUSE } [\text{BECOME}[z \text{ BE-AT } w]]$

例えば、「割る」を LCS で表示すると、次になる。

$[x \text{ ACT}(-\text{ON } y)]\text{CAUSE } [\text{BECOME}[y \text{ BE-BROKEN}]]$

以下は由本(2005)が提示した LCS レベルでの 5 つ制約である。

- a. 並列関係 : LCS1 AND LCS2
例 : 「泣き叫ぶ」「仰ぎ慕う」
- b. 付帯状況・様態 : LCS2 WHILE LCS1
例 : 「すすり泣く」, 「持ち寄る」
- c. 手段 : LCS2 BY LCS1

例：「切り倒す」, 「吸い取る」

d. 因果関係：LCS2 FROM LCS1

例：「溺れ死ぬ」, 「泣き濡れる」

e. 補文関係：[LCS2…[LCS1]…]

例：「書き落とす」, 「見逃す」

由本（2005）は、複合動詞の LCS が、AND や WHILE など追加の述語を導入することで、単一の事象を表す LCS に「再分析」されるとしている。即ち、複合動詞の LCS は単純動詞の LCS の枠組みを拡張することで表現されている。

浅尾（2007）は影山（1996）の動詞に対する分類を受け、改めて他動詞を「働きかけ動詞」と「使役変化動詞」の二つに分けて、動詞を以下の 4 つ分類にした。

- 自動詞：

非能格動詞（例：働く，走る）

非対格動詞（例：割れる，消える）

- 他動詞：

働きかけ動詞（例：叩く，洗う）

使役変化動詞（例：割る，刺す）

そして、浅尾（2007）は由本（2005）による LCS についての考えを受け、別のアプローチをとった。それは、複合動詞においても単純動詞の枠組みに従った LCS のみが許されるということを前提とし、その LCS は、元になる二つの動詞の LCS を「重ね合わせる」ことによって得られるという意味の「重ね合わせ規則」である。

その「重ね合わせ規則」に従うのは以下の組み合わせである。

- 使役変化 - 使役変化
- 働きかけ - 使役変化
- 働きかけ - 働きかけ
- 働きかけ - 非能格
- 働きかけ - 非能格
- 非能格 - 非対格
- 非能格 - 非能格
- 非対格 - 非対格

LCS を用いて複合動詞の意味構造を解釈する方法は本研究でも試みる。

なお、従来の日本語複合動詞の意味構造を扱う研究はどちらかというと要素還元主義的なアプローチを採るのがほとんどである。すなわち、複合動詞を構成する単純動詞に分解し、どのような組み合わせになっているかを分析する。しかし、前に述べたとおり、「振る」と「込む」の意味を知っていても、「振り込む」の意味は類推するのが困難であるが、このような習慣的な意味に対する研究はあまりなされていない。次に紹介する研究は、単純動詞の意味の組み合わせではなく、複合動詞でしか表現できない意味に注目した研究である。

2. 3 複合動詞の意味形成に関する研究

複合動詞に対して静的な意味構成の観点から取り込む研究が進んでいる一方で、動的な意味形成の全貌を対象とする研究はほとんどない。野田（2011）は構文文法利用し、複合語（複合動詞と複合名詞）の意味形成の過程を、人間の事象認知の実態に即した形で分析した。

野田（2011）が提示した構文文法の理論的特徴の中で、以下の2点は、従来の複合動詞研究に残った問題点に応用できる。

- ① 文法体系も語彙と同様に、意味と形式のペアとしての記号であり、語彙的知識と文法的知識は連続的である。
- ② 構成要素の意味は構文（複合表現）の意味を動機づけるものの、構文（複合表現）全体の意味は構成予想に還元して捉えるものではない。

この構文理論の考えを複合動詞に適応できるならば、従来の複合動詞の研究が扱わない、ボトムアップ³的、ゲシュタルト的なアプローチを採ることが出来るだろう。

「構文」という単位は、認知言語学における構文理論に多く使われ、研究者により定義も大きく異なっている。野田（2011：5）は以下のように構文を定義した。

³ ボトムアップ的アプローチとは、組み合わせ要素から全体の意味を分析するアプローチである。複合動詞だと、V1 と V2 から複合動詞の意味を分析するのがボトムアップ的アプローチである。反対的なトップダウン的アプローチは、要素還元主義的なアプローチである。

構文：意味と形式との結び付きが習慣化したゲシュタルト的な複合体⁴。

また、「...それぞれの複合語について、同一形式に複数の意味が結びついた、多義的な（複合語レベルの）構文（construction）であると位置づけ、また複合語の意味形成を構文的多義ネットワークの形成であると位置づけた...」と述べている（野田，2011：5）。つまり、複合語（複合動詞、複合名詞のいずれも）は現代日本語における最小構文の事例だと位置づけた。

そのため、野田（2011）は個々の複合語動詞の意味について百科事典的意味⁵を検討し、そこからボトムアップ的に現代日本語において確立していると考えられる

表 2 の 13 個複数の構文の意味を抽出した。

そして、その複数の構文の意味によって形成される構文的多義ネットワークを提示した（図 3）。野田（2010）がこのネットワークに従い、複数の構文の意味の連続性及びそれぞれの複合語の意味形成の全体像が見えると主張している。

⁴ 21 世紀初頭に発展したゲシュタルト心理学によると、人間の精神は部分や要素の集合ではなく、全体性や構造こそ重要視されるべきとした。この全体性を持ったまとまりのある構造をドイツ語でゲシュタルトと呼ぶ。野田の構文をこの考えに沿って解釈すると、「全体は要素の単なるモザイク的な集まりではなく、それ自体構造をもち、ゲシュタルトを形成し、部分はその全体によって規定されている」（野田，2011）というものである。

⁵ 松本（2003）によると、認知言語学の意味観における百科事典的知識とは、「専門知識によらない、素朴で日常的な世界解釈に基づくもの」である。

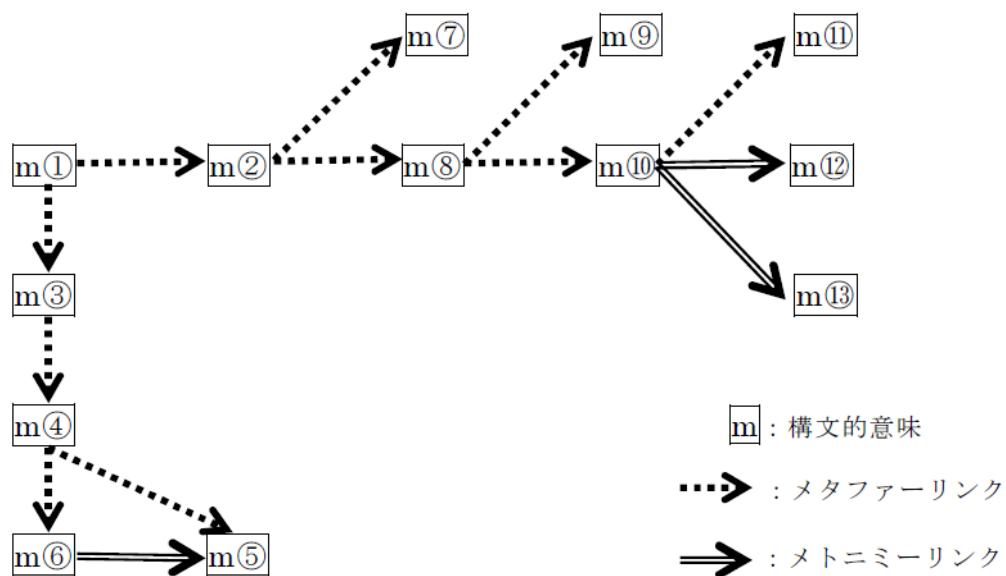


図 3 複合動詞における構文的多義ネットワーク ((野田, 2011) より引用)

本研究も同じく，人間の言語使用や言語習得の過程に係わるボトムアップ的なアプローチを採り，より大胆な考えを提案する．即ち，この過程を模擬し，直接に見ることである．次章から，この考えを実践する実験のデザインを紹介する．

表 2 複合動詞構文的意味分類表

構文的意味①:
移動主体が, ある動き V1 を伴い, ある移動 V2 を実現する
構文的意味②:
移動主体が, なんらかの対象に対する働きかけとしてのある行為 V1 を, 反復的もしくは(長期)継続的に伴い, ある移動 V2 を実現する
構文的意味③
移動主体が, ある行為もしくは状態変化 V1 を伴い, かつその行為もしくは状態変化 V1 の結果として, ある移動 V2 を実現する
構文的意味④
変化主体が, ある行為もしくは状態変化 V1 の結果として, ある状態変化 V2 を実現する
構文的意味⑤
変化主体が, 他者や, 他の物事からの働きかけによって生じるある動き V1 の結果として, ある変化 V2 を実現する
構文的意味⑥
使役行為者が, ある行為 V1 により対象に働きかけ, その結果として対象にある使役行為 V2 を実現させる
構文的意味⑦
主体が, ほぼ同時に, ある事態 V1 及び別の事態 V2 を実現する
構文的意味⑧
主体が, ある事態 V1 を, 継続的であり程度性・徹底性が高い事態 V2 として実現する
構文的意味⑨
主体が, 本来ならば実現はずの, もしくは実現すべきある事態 V1 を, 未遂・不成立に終える V2
構文的意味⑩
主体が, ある事態 V1 を, ある期間もしくは習慣的に継続する V2
構文的意味⑪
複数の主体が, ある事態 V1 を, 同時もしくは交互に(ある期間)継続する V2
構文的意味⑫
主体が, ある事態 V1 を始動する V2
構文的意味⑬
主体が, ある事態 V1 を完了・完遂する V2

第三章

実験のデザイン

本章では、新しい言葉を創造し、そして理解するという意味づけ過程をできるだけ直接見ることで、ことばの意味づけプロセスを理解するという考えを実践する実験デザインを提案する。

3. 1 目的を達成する基本的考え

本研究では、単純語から複合動詞を作るボトムアップ的アプローチ（野田，2011）を採る。すなわち、既存語は分析対象とせず、新造語を作る環境を構築する。前章に述べた先行研究から、日本語複合動詞を対象とすることが実効的だと考えられる。つまり、実験の目的は、新しい複合動詞を作る二段階の「意味づけ」プロセスを模擬することである。

さて、前章で紹介した意味づけプロセスの全体図（図 4）から考えてみよう。被験者を二組に分け、それぞれに第一段階、第二段階の役割を分配することで、この「意味づけプロセス」の全体が実験で表現できると考えた。ようするに、一方の群（以下、「作業群」とする）の人は複合動詞を組み合わせる材料としての単純語で複合動詞を作り、そして、もう一方の群（以下、「評価群」とする）の人は作業群が作った複合動詞を理解しようとする。

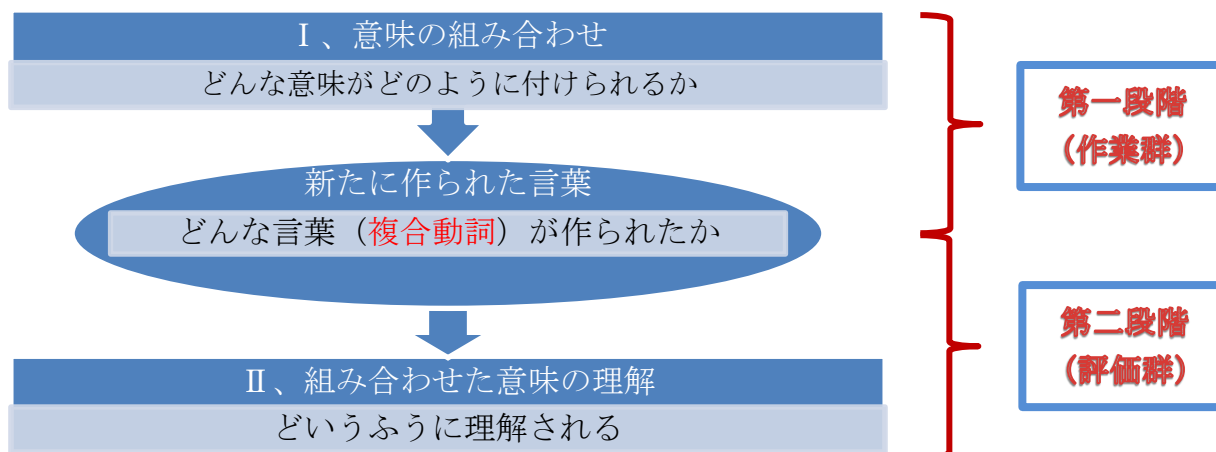


図 4 意味づけプロセスを模擬する実験の流れ

3. 2 予備実験

まず、この基本的考え方に基づいた予備実験を行い、実験計画と分析方法を検討する。本節は、この予備実験の被験者や手続き、および、結果と分析の試みを述べ、実験デザインの問題点や有効だと考えられる分析方法をまとめる。

3. 2. 1 予備実験の方法

被験者：大学院生（日本語母語話者）10名⁶

- 作業群：6名（男性5名，女性1名）
- 評価群：4名（男性3名，女性1名）

実施日：12月23日

材料：

- 日本語基本動詞データベース（小泉ら，1989；国立国語研究所，2001）から、浅尾（2007）による単純動詞の4つの分類における各分類から複数個が入るように、24個の単純動詞を選んだ（表3）。
- 平仮名で表示する。

⁶作業群の6名はそれぞれ3個の複合動詞を作り、評価群の4名はそれぞれ9個の複合動詞を評価する。つまり、各複合動詞が2回を評価される。

表 3：予備実験でもちいた単純動詞

働きかけ動詞	かむ，なげる，うつ，そなえる，かく
使役変化動詞	けす，かわかす，うまる，あます，かくす
非対格自動詞	きえる，かくれる，かわる，かわく， うもれる，さわる，あまる，あそぶ
非能格自動詞	およぐ，なく，おどろく，はたらく，いく，はいる

手続き：

図 4 に示した意味づけプロセスの二段階に対応させ，作業群 6 名による実験 1 を実施した後に，評価群 4 名による実験 2 を行う。

実験 1 作業群

1. 被験者に上記の単純動詞表にある動詞をランダムな順にした表 4 を提示し，その中から単純動詞を 2 つ選び，それを組み合わせた新しい複合動詞をつくるよう指示する。

表 4 予備実験で実際に作業群に呈示した単純語

かむ	なげる	うつ	そなえる	かく	けす
かわかす	うまる	あます	かくす	きえる	かわる
かくれる	うもれる	かわく	さわる	あまる	あそぶ
おどろく	およぐ	なく	はたらく	いく	はいる

2. 作った複合動詞の意味を記入してもらう。
3. 作った複合動詞を用いた例文を 1 個作ってもらう。
4. 同じ手順で，新しい複合動詞をもう 2 個作ってもらう。
5. その後，実験の妥当性や課題の難易度を調べるため，作業群の参加者に次の質問に答えてもらった。
 - 「材料としての単純語の数が足りるか」
 - 「3 つの新しい複合語動詞を作るのが苦しいか」
 - 「自分は後何個新しい複合動詞を作れると思うか」

実験 2 評価群

1. 作業群が作成した複合動詞の中からランダムに選んだ 9 個を被験者に呈示する。
2. それぞれの複合動詞について，自分が理解した意味を記入してもらう。
3. 作業群が付けた意味を呈示し，以下の質問にどのくらい当てはまるかを 5

段階で答えてもらう。

- 「作業者が付けた意味をどれほど理解できるか」
- 「面白いですか」
- 「違和感があるか」
- 「自分で使いたいかな」

3. 2. 2 予備実験の結果

作業群がつくった複合動詞は表 5 の 18 個である⁷。

表 5：予備実験で作業群が作った複合動詞

なげうつ	あそびぎえる	うもれきえる	かわりゆく	かきあそぶ
かきけす	おどろきあます	あそびかく	なきあまる	おどろきなく
なげうつ	かわりゆく	おどろきなく	かききえる	なきかわる
なきあまる	あそびかわる	けしかわる		

- 複数に出ている複合動詞：4 個（それぞれ 2 回）
「なげうつ」「かわりゆく」「おどろきなく」「なきあまる」
- 既存複合動詞：3 個
「なげうつ」「かわりゆく」「かきけす」
- 「重ね合わせ規則」（浅尾，2007）に適合するもの：8 個，適合しないもの：6 個

実験後のアンケートから以下の結果が分かった。

- 素材の量は中間（3 人が多い，3 人が少ない）
- 3 個複合動詞を作るのは難しかった。（83%）
- 現有単純語で 3 個以上の複合動詞を作れると示唆しているが，5 語以内と思われる。（6 人の平均値）

3. 2. 3 予備実験の分析

以上のデータの分析を試みる。ここでは意味づけプロセスの分析方法の候補として，以下の 3 つを考える。

⁷これらに対して，作業群，評価群がつけた意味，作業群がつくった例文は，附録 3 で示す。

1. フレーム意味から構文的意味への分析
2. 複合語動詞の既存制約による分析
3. メタファーによる意味変化による分析

これらの有効性を個別に検討し、本実験の分析方法として採用できるかどうかを判断する。

3. 2. 3. 1 フレーム意味から構文的意味への分析

作業群が付けた意味や例文をもとに、各単純語の意味を動詞シソーラス⁸データベースから、複合動詞の意味を野田(2011)が提案した構文的意味(表 2)から、それぞれ当てはまるものを選ぶ。

例を挙げて分析する。

「うもれる」＋「きえる」→「うもれきえる」の場合、

- 動詞シソーラスから、単純語「うもれる」のフレーム意味を次のように確定できる。

V1: ([動作主]の働きかけで)[1]が[2]の下や中に埋まった状態になる

ここで、[1][2]はガ格、ヲ格が規格化した動詞の意味表現であり、つまり、各項(主に名詞)の意味役割である。

- 動詞シソーラスから、単純動詞「きえる」のフレーム意味を次のように確定できる。

V2: ([動作主]の働きかけで)([1]が消滅し)[1]が存在しない状態になる

- 新しい複合動詞「うもれきえる」に対して、作業群の人が「ある物が何かに埋もれて消えてしまう様子を表す」と意味づけ、さらに、「足跡が雪に埋もれ消えた」という例文を付けていた。それを従って、野田(2011)

⁸ ここで用いた動詞シソーラスは竹内ら(2008)による言語処理のための日本語の動詞辞書である。動詞の意味は名詞との組み合わせ次第で変わるので、各動詞の語義単位で代表例文を作成し、それを表層の格(ガ格、ヲ格)で分解して記述するものである。さらに、竹内らはガ格、ヲ格が規格化した動詞の意味表現との対応を番号(例:[1])で記述した。以下はその意味表現をフレーム意味と呼ぶ。

が提示した 13 個の構文的意味から、「うもれきえる」の意味を次のように確定した。

V1+V2 (複合動詞)：変化主体が，ある行為もしくは状態変化 V1 の結果として，ある状態変化 V2 を実現する

結果として，図 5 の意味形成過程にまとめられる。

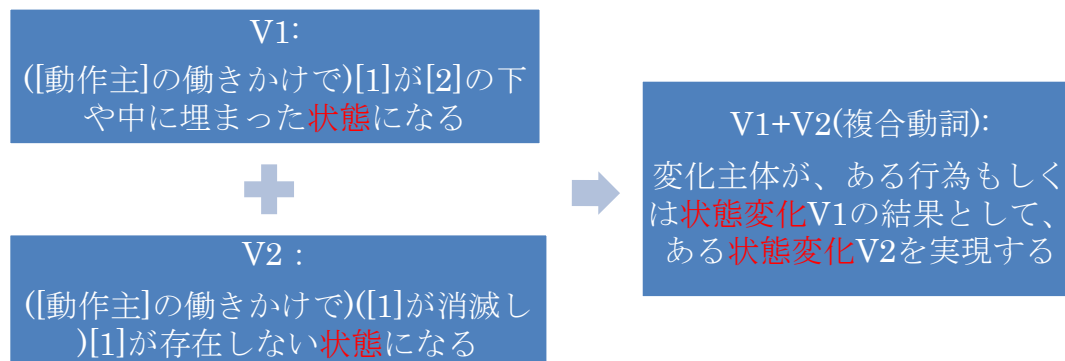


図 5 「うもれきえる」の意味形成図

上記図 5 が表示しているように，同じ変化主体 ([1]) が「うもれる」(V1) という状態変化の結果として「きえる」(V2) という状態変化を実現するので，「うもれきえる」の意味が生じる過程が見えた．この例では，V1 と V2 の意味が変わらず，因果関係を通して意味を組み合わせている．

この方法には，直観的に各複合動詞の構文的意味形成が見えるのが，全体的に概観できない．そして，使用した単純語の意味解釈と複合動詞の意味解釈を同じ仕組みで説明するものではない

3. 2. 3. 2 複合動詞の既存制約による分析

この分析方法では，新しく作られた複合動詞を「重ね合わせ規則」(浅尾，2007) のルールに当てはまるかどうかを分析した．この規則に従うかどうかを見る前に，語彙的複合動詞と統語的複合動詞を分類しなくてはならない．以上の分析結果は表 6 である．

結果から，新しく作られた複合動詞の中に，「重ね合わせ規則」(浅尾，2007) に適合するものと適合しないものの数には大きな差が無いということが分かった．

この方法の良さは新しい複合動詞を全体的に規則に従うかどうかの二種類

に分け、評価群の理解に対して、その分類により分けて考えることも出来る点である。つまり、この分析方法は意味づけプロセスの接点である。重要な分析方法だと思われるので、どの規則を採用するかを慎重に考えるべきである。

表 6 予備実験で作られた複合動詞の「重ね合わせ」規則に対する分類

語彙的複合動詞	重ね合わせ規則に従う	9
	重ね合わせ規則に従わない	5
統語的複合動詞	—	4

3. 2. 3. 3 メタファーによる意味変化による分析

本研究は V1 と V2 の意味から複合動詞の意味を導くというボトムアップのアプローチを採ると述べたが、この分析方法では、まず複合動詞の意味に含まれた V1 と V2 の意味を見つけ、そして、また V1 と V2 から複合動詞への意味形成を解釈する。

「なげる」＋「うつ」→「なげうつ」を例示する。

- 「なげうつ」に付けられた意味：
なにからなにまで自分でやる。ボールを投げることからボールを打つことまで全部自分でやる様から。
- 例文：
彼はとうとう会社の設立をなげうった。

以上の情報から、新しい複合動詞には、「なげる」(V1) は野球のプレーの開始としての投げることを表現し、「打つ」(V2) はプレーの終わりとしての打つことを表現している。V1 と V2 から複合動詞への意味形成は以下の図 6 で表示できる。

この方法で、野田 (2011) が既存複合動詞からまとめた 13 種類の構文的意味に当てはまらない複合動詞の分析に補助できる。しかし、すべての複合動詞に応用できるわけではない。

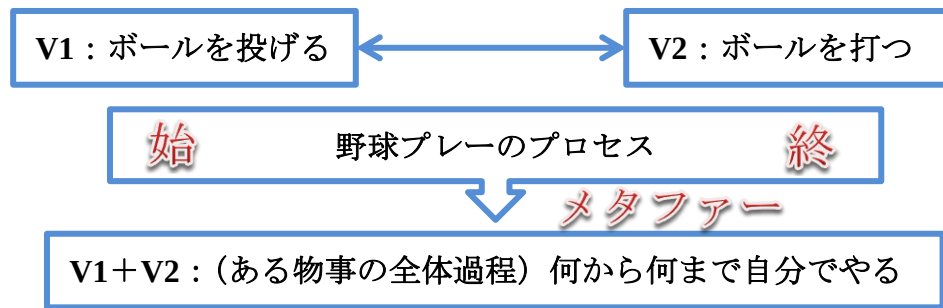


図 6 メタファーによる意味形成の例

3. 2. 4 予備実験のまとめ

予備実験の分析から、実験デザインに関して以下のような問題が浮かび上がった。

- 作業群が作った複合語動詞に既存複合動詞があった
- 平仮名で表示したことにより、単純語動詞の多義性が高くなり、分析が難しくなった

例：作られた複合語「かく」＋「けす」→「かきけす」

- つけられた意味：「消えてなくなること。」
- 作れた例文：「電車の音で会話がかきけされた。」
- 広辞苑で記入している意味：「消す」を強めていう語。「一・すように姿が見えなくなった」
付けている例文：「議長の声は怒号に掻き消された」

実際は、実験者は「かく」を「書く」の意味で呈示していた。しかし、上の記述からわかるように作業群の被験者は「掻く」の意味で使用了。

このような多義性は分析を困難にするので、できるだけ排除したほうが良いだろう。

- 日本語基本動詞データベース（小泉ら，1989；国立国語研究所，2001）の動詞すべてにフレーム意味が記述されているわけではない。

今回行った分析方法では、単純語のフレーム意味が把握できないと、「フレーム意味から構文的意味へ」の分析に入れない。

- 作業群・評価群の付けた意味の比較が難しい場合があった。

たとえば、作業群の作った複合動詞「なきあます」について、この複合動詞を作った被験者は「まだまだ感動が足りない（ゆえに「泣く」に「余っている」）」と意味づけた。一方、作業群の被験者は「蛇足のようにいつまでも泣き続ける様子」と意味づけた。

次に、分析方法の有効性をまとめる。

- 「フレーム意味から構文的意味へ」の分析方法が有効であると判断した。なぜなら単純語のフレーム意味と複合動詞の構文的意味は同じ形式意味を表示しているので、動詞シソーラスでフレーム意味を収集されているものに限定してうまく材料（単純語）を選択すれば、各複合動詞の意味形成過程が表示できると思われる。しかし、使用した単純語の意味解釈と複合動詞の意味解釈を同じ仕組みで説明するものではないので、研究者の内省による解釈のぶれが出る危険性も考えられる。
- 「複合語動詞の既存制約による分析」は、新しい複合動詞の意味形成を全体的に見る方法である。この方法は、個々の複合動詞の意味形成が分析するものではないが、作業群の人が付けた意味を評価群の人の理解と比較でき、意味づけプロセスを繋ぐことができるだろう。
- 「メタファーによる意味変化により分析」はすべての複合動詞に応用できないが、単純動詞の意味的働きがはっきり見えない複合動詞には補助分析として有効であると判断した。

3. 3 本実験

前節で述べた予備実験の分析結果を受けて検討した、本実験のデザインを述べる。

3. 3. 1 本実験の改善点

実験方法についての予備実験から改善したところを以下にまとめる。

- 本研究では新しい複合動詞が作られる過程を分析したいので、既存複合動

詞は分析対象と見なされない。したがって、既存複合動詞にならない材料（単純語）を選択する

- 単純語動詞の多義性を抑えるため、漢字で単純語を表示する
- 複合語につけた意味の比較を容易にするため、評価群にも作業群と同じように意味と例文の両方を作ってもらう

分析について気をつけたところをまとめる。

- 複合動詞の作成と理解を対応させるため、作業群と評価群の人をペアにした実験を行う
- 単純語の意味を多角的に把握するため、動詞項構造シソーラスと日本語フレームネット（Japanese Frame Net）⁹という 2 つのデータベースから単純語を選ぶ
- 評価群に、作業群が作った新しい複合動詞に対する共感度を問う
- 同じ枠組みで単純語と複合動詞の双方を表示するため、LCS 調査アンケート¹⁰を導入する

3. 3. 2 本実験の方法

被験者：

大学院生（日本語母語話者）：30 名

- 作業群（15 名）
- 評価群（15 名）
- 性別：男性 27 名，女性 3 名

材料：

日本語フレームネット (Japanese Frame Net) が収集した動詞 75 個から、分析が容易になるよう以下の方針に則り実験材料を選んだ。

⁹ Fillmore(1976)は有機的相互作用を持つ知識体系が言語の発話や理解のための背景知識として必要不可欠であると考え、その知識体系を「フレーム」(frame)と呼んだ。そして、1990 年代後半に、Fillmore を体表としてフレームネット(Frame Net)プロジェクトが始動した。同様の枠組みに基づいて構築をしている日本語フレームネット（藤井・小原，2003）は、日本語話者が持っている日本語語彙についての知識を収集し、辞書の定義文のみならず一般常識やさらに百科事典的知識をも含んだものである。

¹⁰ LCS 辞書を構築するため、伊藤（2006）は言語学の背景を持つ複数の被験者に対するアンケート調査を行った。そのアンケート調査に基づき、動詞（単純動詞・複合動詞）の基本的な LCS を分類した。具体的な例を付録 4 に示す。

- ・ LCS 辞書（伊藤，2006）を構成するための調査対象に含まれている
- ・ 複数のフレームに属しない単語を選択する
- ・ 複合動詞を除外する
- ・ 漢字で表示できない単語を除外する
- ・ 動詞項構造シソーラスに収集されている単語を選択する
- ・ 動詞項構造シソーラスにフレームで意味を表示されていない語を除外する

結果として，表 7 に示す 8 個の単純動詞を選んだ．

表 7：本実験で選んだ単純動詞（それが所属するフレームも示す）

単純語	frame	フレーム（和訳）
驚かす	Experiencer_obj	経験者目的語
苦しむ	Experiencer_subj	経験者主語
転ぶ	Motion	動作
下がる	Motion_directional	動作方向
望む	Perception_active	認知能動
聞こえる	Perception_experience	認知経験
頼る	Reliance	依存
歩く	Self_motion	自己動作

本実験の手続き：

予備実験と同じく，意味づけプロセスの二段階に対応させて行う実験をそれぞれ実験 1，実験 2 として記述する．

実験 1 作業群

1. 被験者に上記の単純動詞表にある動詞をランダムな順序にして作った表 8 を提示し，その中から単純動詞を 2 つ選び，それを組み合わせた新しい複合動詞をつくってもらう．

表 8 本実験で作業群が用いた単純語動詞

おどろ 驚 かす	くる 苦しむ	ころ 転ぶ
さ 下がる		き 聞こえる

たよ 頼る	ある 歩く	のぞ 望む
----------	----------	----------

2. 作った複合動詞の意味を記入してもらう。
3. 複合動詞を用いた例文を1つ作ってもらう。
4. 用いた単純語及び作った複合動詞について LCS アンケート(具体内容を付録4に示す)に答えてもらう。
5. 同じ手順で、新しい複合動詞をもう2個(計3個)作ってもらう。

実験2 評価群

1. 被験者に作業群が作成した複合動詞を1個ずつ呈示し、自分が理解した意味を記入してもらう。
2. その複合動詞を用いた例文を1つ作ってもらう。
3. 複合動詞及びこの複合動詞に組み合わされている単純語について LCS アンケートに答えてもらう。
4. 作業群が新しい複合動詞に付けた意味を呈示し、それに対して、B群の共感度について評価してもらう。
5. 同じ手順で、新しい複合動詞をもう2個(計3個)評価してもらう。

評価群の手順4にある共感度は意味理解に関する主観的な共通度である。例えば次のようなものである。

- 作業群の人は、自身が作った複合動詞「苦しみ下がる」に「苦しむことによって気分が下がること」という意味を付け、「足をぶつけて苦しみ下がる」という例文を付けた。
これに対して、評価群の人が「悩んだ末にあきらめること」という意味と理解し、「彼は進学を苦しみ下がった」という例文を付けた。
それゆえ、「自分の解釈が相手の説明と合致する割合はいくらですか? ____〇割」という共感度に対する質問に、評価群の人は0割であると答えた。
- 作業群の人は、自身が作った複合動詞「頼り望む」に「誰かに何かを頼り、それに対する反応を望むこと」という意味を付け、また、「先生に問題の解き方を頼り望む」という例文を付けた。
これに対して、評価群の人が「何か(誰か)に頼ること」という意味と理解し、「Aさんに勉強を教えてもらえるように頼り望んだ。」という例文を付けた。
それゆえ、同じ共感度に対する質問に、評価群の人は10割であると

答えた.

第四章

実験結果と分析・考察

本章では本実験の結果を概観し，分析・考察する．まず，全般的に実験結果を概観し，前に述べた意味づけプロセスの二段階における各問いに答える形で，具体例を挙げながら考察していく．

4. 1 結果概観

作業群の実験参加者 15 人が作った新しい複合動詞 45 個を表 9 に示す．

表 9：本実験における新しい複合動詞

望み頼る	転び苦しむ	頼り歩く	望み歩く	歩き転ぶ
苦しみ下がる	頼り望む	苦しみ歩く	聞き望む	転び頼る
頼り聞く	苦しみ歩く	頼り歩く	驚き苦しむ	望み下がる
頼り歩く	頼り下がる	望み苦しむ	転び歩く	苦しみ頼る
驚か下がる	聞こえ望む	苦しみ歩く	聞こえ苦しむ	望み転ぶ
苦しみ歩く	苦しみ望む	転び下がる	転び歩く	聞こえ頼る
望み苦しむ	頼り歩く	驚き転ぶ	下げ望む	驚かし歩く
望み転ぶ	転び下がる	苦しみ転ぶ	頼り歩く	聞き驚く

そして，複数回作られた新しい複合動詞は以下になる（表 10）．

表 10：複数回作られた新しい複合動詞

頼り歩く	5 回
苦しみ歩く	4 回
転び歩く	2 回
転び下がる	2 回
望み苦しむ	2 回
望み転ぶ	2 回

この結果から、意味づけプロセスの二段階を解明するため、1章で提示した目的に応じた3つの問い、及び、各問いをさらに詳細化した検討すべき内容を、次の順に見ていきたい。

1. どんな複合動詞が作られたか

- ・ 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の数
- ・ 既存の制約に従う複合動詞の数、そして、従わない動詞の数
- ・ 使われた単純動詞の頻度とその分布
- ・ フレーム意味の頻度と分布

2. どんな意味がどのように付けられるか

- ・ 付けられた構文的意味の種類及び数
- ・ 現れなかった構文的意味の種類
- ・ 単純動詞のフレーム意味から構文的意味への組み合わせ過程
- ・ 構文的意味の分類に入らないもの単純語の組み合わせられ方

3. どういうふうに理解されるか

- ・ 作業群・評価群それぞれの構文的意味の分布とその違い
- ・ 「共感度」の全体的特徴
- ・ 共感度が高い複合動詞の特徴
- ・ 共感度が低い複合動詞の特徴
- ・ 制約などの既存の知見との関係

4. 2 問い 1：どんな複合動詞が作られたか？

4. 2. 1 統語的複合動詞と語彙的複合動詞の数

現代日本語の複合動詞に関する主な先行研究はいずれも、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」とを区別するという立場を採っている（2. 2 節参照）。本研究でも、作業群が作った45個の複合動詞を同じやり方で区別することから検討を始める。この分類により、どちらのタイプがより作られやすいかが判断できるだろう。

区別の仕方を簡単に言えば、「統語的複合動詞」はV1がV2の目的語、または、主語となる事象を表すという補文関係として捉える。すなわち「V1をV2する」あるいは「V1がV2する」というかたちになっていれば統語的である。

一方、「語彙的複合動詞」は補文関係をとらないものを指す。

実験で作られたそれぞれのタイプの複合語の例を挙げる。「歩き苦しむ」という複合語を作った作業群被験者はこれを「歩くことがつらい」という意味としている。ここでは「歩くこと」が「つらいこと」の目的語となっており、補文関係と考えることができる。一方、「転び頼る」を語彙的複合動詞の例として挙げられる。この複合動詞について作業群被験者は「転ぶように頼る、懇願する」という意味を付けている。これは「転びが頼る」「転びを頼る」という意味にはならないので、語彙的複合動詞と判断できる。

注意しなくてはならないのは、同じ形式でも付けられる意味によってどちらのタイプにもなり得るということである。例えば、「望み苦しむ」という新しい複合動詞に対して、ある作業群被験者は「切迫した状態に先の展望が開けず」という意味を付けた。そして、同じ複合動詞を作った別の作業群被験者は「はげしく物事を欲求する事」という意味を付けている。前者の意味で用いるなら、この複合動詞は統語的であり、後者だと語彙的である。

本実験から得られた複合動詞においては、「統語的複合動詞」は 9 個、「語彙的複合動詞」は 36 個という結果になった（表 11）。に各タイプの複合動詞を示す。（）内の数字は複数回現れた複合動詞が作られた数である。この結果から、語彙的複合動詞のほうが作られやすいということが分かる。既存の複合動詞にどちらのタイプがどの程度あるかを調べた既存研究がないため、本実験で見出された傾向が既存複合動詞と同じかどうかということは判断できない。

表 11：統語的・語彙的複合動詞とその個数

複合動詞のタイプ	個数	複合動詞（回数）
統語的複合動詞	9	望み苦しむ (2), 歩き苦しむ, 下がり苦しむ, 聞き望む, 聞こえ望む, 聞こえ苦しむ, 望み転ぶ, 聞こえ頼る, 下げ望む
語彙的複合動詞	36	望み苦しむ (2), 頼り歩く (5), 苦しみ歩く (4), 転び下がる (2), 転び歩く (2), 転び望む, 驚き下がる, 聞こえ歩く, 望み頼る, 聞き驚く, 転び苦しむ, 望み歩く, 苦しみ下がる, 歩き転ぶ, 頼り望む, 転び頼る, 頼り聞く, 驚き苦しむ, 望み下がる, 頼り下がる, 苦しみ頼る, 驚か下がる, 苦しみ望む, 驚き転ぶ, 驚かし歩く, 望み転ぶ, 苦しみ転ぶ,

4. 2. 2 既存の制約に従うかどうか

語彙的複合動詞は、各先行研究の対象として扱われている（2. 2 節参照）、本研究でも、36 個の「語彙的複合動詞」に注目し、影山（1996）が提案した「他動詞調和原則」に従うかどうかを見ていく。

原因だというと、まず、この「他動詞原則」は動詞を二つに分けて研究すると主張する影山（1993）が提案したのである。それに、二章で紹介した各先行研究はこの「他動詞原則」をある程で使用したのである。

2. 2 節で紹介したように、用いた V1（前項）と V2（後項）に固有の項構造より、複合動詞が「他動詞調和原則」に従うかどうかを判断できる。原則に従うのは以下の組み合わせである。

- 非能格＋非能格
- 非対格＋非対格
- 非能格＋他動詞
- 非対格＋他動詞
- 他動詞＋他動詞

影山（1996）は、外項をとる意志自動詞が「非能格自動詞」、外項を取らない無意志自動詞が「非対格自動詞」と定義した。本実験に用いた単純動詞では、例えば、「歩く」は非能格自動詞、「転ぶ」は非対格自動詞である。8 つの単純語の分類を表 12 に示す。

表 12：実験に用いた単純動詞の項構造の分類

() 内の単語は材料として呈示していないが、被験者が用いた単純動詞

	単純動詞
非能格自動詞	歩く，下がる，頼る
非対格自動詞	転ぶ，苦しむ，聞こえる，（驚く）
他動詞	望む，驚かす，（聞く），（下げる）

本実験で作られた複合動詞がどの項構造の組み合わせになっているか表 13 に示す。() 内の数字は複数回現れた複合動詞が作られた数である。結果として、36 個の「語彙的複合動詞」において、「他動詞調和原則」に従う複合動詞は 19 個、従わないものは 17 個あるという結果になった。

表 13：作られた複合動詞の制約に関する分類

項構造の組み合わせ	個数	複合動詞
非能格＋非能格	6	頼り歩く (5), 頼り下がる,
非対格＋非対格	3	転び苦しむ, 驚き苦しむ, 苦しみ転ぶ
非能格＋他動詞	7	望み頼る, 望み歩く, 頼り望む, 頼り聞く, 望み下がる, 驚か下がる, 驚かし歩く,
非対格＋他動詞	2	転び望む, 驚き転ぶ,
他動詞＋他動詞	1	聞き驚く
その他	17	苦しみ歩く (4), 聞こえ歩く, 驚き下がる, 歩き転ぶ, 転び頼る, 望み転ぶ, 望み苦しむ, 苦しみ頼る, 苦しみ望む, 苦しみ下がる, 転び下がる, 転び歩く, 転び歩く, 転び下がる

既存研究では、もちろん例外はあるものの、語彙的複合動詞の多くは他動詞調和原則という制約に従うと考えている¹¹。しかし、本実験で作られた複合動詞では、制約に従うものと従わないものが同じくらい現れた。この結果から、新しい語彙的複合動詞を組み合わせる際には、既存の多くの語彙的複合動詞に従う「他動詞調和原則」に影響されないと思われる。

4. 2. 3 用いられた単純動詞の頻度

本実験の材料として単純動詞を選択する際に、日本語フレームネット (Japanese Frame Net) から各種類の動詞を選んだ。この種類でどの程度頻度に偏りがあるかをまず見てみる (表 14)。赤字で示したものは回数が非常に多いか少ない部分である。以下ではこの点に着目して分析する。

また、この表の一番右の列には「偏り度」を示した。これは、

偏り度 = $V1$ に使われた回数 / 総数

で計算した値で、 $V1$ 、 $V2$ のどちらでより多く使われているかを示す指標である。すなわちこの値は、両者で同数使われるなら 0.5、 $V1$ でより多く使われるなら 0.5 より大きく、 $V2$ でより多く使われるなら 0.5 より小さくなる。

¹¹ だからこそ「制約」「原則」という言葉が使われる。

表 14：使われた単純動詞の頻度．フレームネットによる分類．

単純動詞	frame	V1	V2	総数	偏り度
驚かす(驚く)	Experiencer_obj	5	1	6	0. 83
苦しむ	Experiencer_subj	8	7	15	0. 53
転ぶ	Motion	7	5	12	0. 58
下がる(下げる)	Motion_directional	2	7	9	0. 22
望む	Perception_active	7	6	13	0. 54
聞こえる(聞く)	Perception_experience	6	1	7	0. 86
頼る	Reliance	8	4	12	0. 67
歩く	Self_motion	2	14	16	0. 13

まず、頻度に見られる特徴のひとつとして、「苦しむ」と「歩く」がおおよそ同じ程度使われたが、「苦しむ」は V1 と V2 の役割にほぼ同じ回数使われた（偏り度=0. 53）のに対し、「歩く」は非常に差がありほとんどが V2 で使われている（偏り度=0. 13）．

あまり使われなかった単純動詞の方を見ると、V1 として一番使われなかったのは「下がる」と「歩く」であり、各 2 回しか使われなかった．V2 として一番使われなかったのは「驚かす」と「聞こえる」であり、各 1 回しか使われなかった．

さらに、これら回数が少ない動詞の一部だけに、自他交替¹²という変形をして使われた事例が見られた．それぞれの回数は以下の通りである．

- 下がる ➡ 下げる （1 回）
- 驚かす ➡ 驚く （5 回）
- 聞こえる ➡ 聞く （3 回）

作業群被験者は、元の動詞の意味より変形した方の意味が組み合わせやすいと感じる可能性がある．そのため、変形した動詞（「下げる」など）も入れて、頻度を図示する（図 7）．

¹² 自動詞を他動詞に、あるいは、他動詞を自動詞に変化させること．

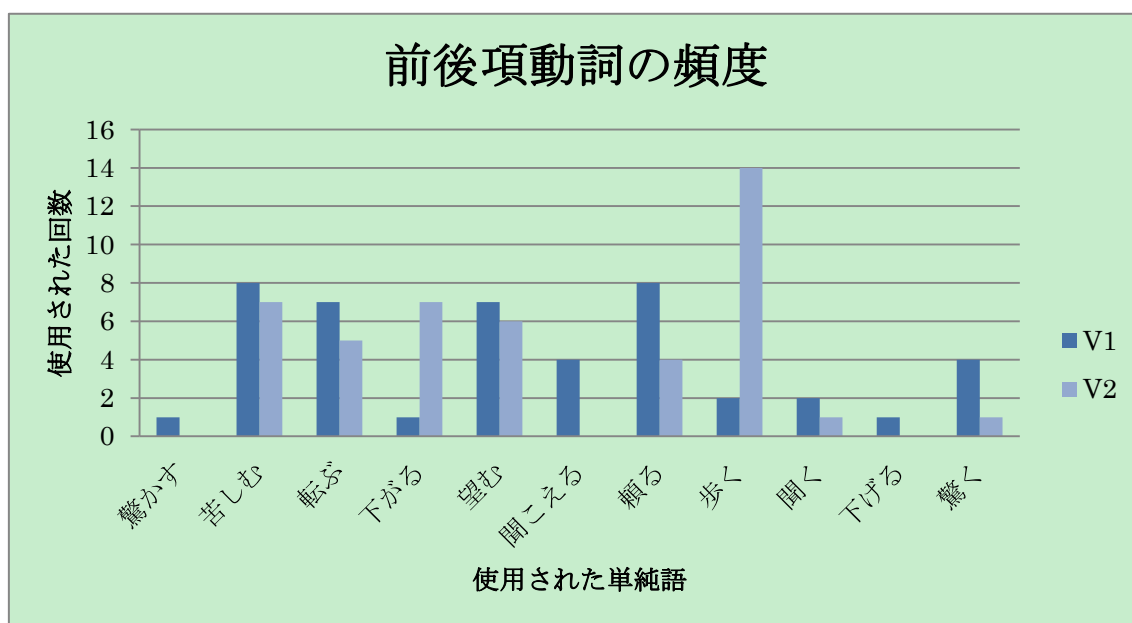


図 7：単純語の前項 (V1)・後項 (V2) の頻度

前の表 14 比べると、以下のことがわかる。

- ・ 「驚かす」を使う場合は「驚く」へ変形することがほとんどで、「驚かす」としてはV1としてしか使われない。
- ・ 「聞こえる」は原型と変形した型「聞く」の両方が使われるが、原型ではV1としてしか使われない。
- ・ 「下がる」は「歩く」と同じように、V2として使われた場合がV1として使われた場合よりかなり多い。
- ・ 「望む」も「転ぶ」も「苦しむ」のように多く使われ、V1としてもV2としてもほぼ同じ程度使われた。

次に、Frame との関係进行分析するため、表 14 をいくつかのカテゴリーに分類して分析する。ここでは、

- ・ 経験に関する Frame
- ・ 動きに関する Frame
- ・ 知覚に関する Frame
- ・ その他の

4 つにカテゴリー分けを行い、頻度を計算した。その結果を表 15 に示す。単純動詞ごとの頻度と異なり、このカテゴリーごとで見るとどのカテゴリーも同じくらいの頻度で使われていることがわかる。また、動きに関するカテ

ゴリーのみ偏り度が小さい。

表 15 カテゴリー分けした Frame ごとの単純動詞の出現頻度

	V1	V2	総数	平均	偏り度
Experiencer_obj Experiencer_subj	13	8	21	10. 5	0. 6190
Motion Motion_directional Self_motion	11	26	37	12. 3	0. 2973
Perception_active Perception_experience	13	7	20	10	0. 6500
Reliance	8	4	12	12	0. 6667

表 16 の頻度の分析では「歩く (Self motion)」の数が多く偏りも大きいので、これを外して作ったものが表 16 である。この表では、カテゴリーごとの平均頻度はさらに均等化され、さらに、偏り度も全て 0. 5 付近 (0. 42~0. 67 程度) に収まっている。このように frame のカテゴリーで見ると「歩く (Self motion)」が、単純語の使われ方として特異な性質を持つことが分かった。

表 16 カテゴリー分けした Frame ごとの単純動詞の出現頻度
(Self_motion を除く)

	V1	V2	総数	平均	偏り度
Experiencer_obj Experiencer_subj	13	8	21	10. 5	0. 6190
Motion Motion_directional	9	12	21	10. 5	0. 4286
Perception_active Perception_experience	13	7	20	10	0. 6500
Reliance	8	4	12	12	0. 6667

4. 2. 4 単純動詞のフレーム意味の頻度

動詞シソーラス (竹内・乾健ら, 2008) に収集される動詞はその語義単位がフレーム意味で記述されている。そこで、フレーム意味の観点から単純動詞の使用頻度を分析してみる。

ここでは、使われた単純動詞の意味説明と例文を元に、用いたフレーム意

味を判断する(すべての単純動詞に関するフレーム意味は附録 5 を参照)。

例えば、「苦しみ歩く」という新しい複合動詞は、「苦しむ」と「歩く」の組み合わせである。作業群へのアンケートより、用いた V1 と V2 の意味や例文は次の通りである。

- 「苦しむ」の意味：「肉体的、もしくは精神的につらい状態」
例文：「失恋に苦しむ」
- 「歩く」が用いた意味は「足を使用して移動する」であり、例文は「駅まで歩く」であると説明した。

これらの情報より、それぞれのフレーム意味を次のように判断した。

「苦しむ」：

「([動作主]の働きかけで)[1=人]の感情が変化した状態になる」

「歩く」

「([動作主]の働きかけで)[1]が[着点]にいる状態になる」

このようにして用いられた単純動詞のフレーム意味を判断し、各フレーム意味を番号付け、言葉（形式）を抜いて意味だけ見ていくと、以下の表 17 がつくられる。表中の赤字で示したものは回数が非常に多い部分である。青字で示したものは非常に少ない部分である。これをより直観的に見えるように図 8. エラー！参照元が見つかりません。を作った。この図より次のことが見てとれる。

表 17：単純動詞の使用頻度（フレーム意味による分類）

番号	フレーム意味	V1	V2	計
1	〔動作主〕の働きかけで〔2〕が〔1=情報〕を入手して〔1〕が〔2=人〕のもとにある状態になる	1	1	2
2	〔動作主〕の働きかけで〔1〕が〔経路〕を移動して別の位置にいる状態になる	3	11	14
3	〔動作主〕の働きかけで〔1〕が〔起点〕にいない状態になる	0	1	1
4	〔動作主〕の働きかけで〔1〕が〔着点〕にいる状態になる	1	5	6
5	〔動作主〕の働きかけで〔1〕の温度が低い状態になる	0	1	1
6	〔動作主〕の働きかけで〔1〕の程度や水準が低い状態になる	2	2	4
7	〔動作主〕の働きかけで〔1=人〕の〔2=願い, 頼みなど〕が人に受け入れられた状態になる	1	0	1
8	〔動作主〕の働きかけで〔1=人〕の感情が変化した状態になる	9	7	16
9	〔動作主〕の働きかけで〔1=人〕の姿勢が変化する	4	4	8
10	〔1〕が〔2〕について聴覚を用いて知覚動作を行う	4	0	4
11	〔1〕が〔場所〕の内部をあちこち移動する	0	1	1
12	〔1=人〕が〔2〕を取得する〔2〕になる)のを希望する	7	6	13
13	〔1=人〕が〔2=人〕に助けをもらう為〔2〕に依存する	8	4	12
14	〔1=対象〕がそれに対して〔2=動作〕をするのが難しい状態である	1	0	1
15	他	4	2	6

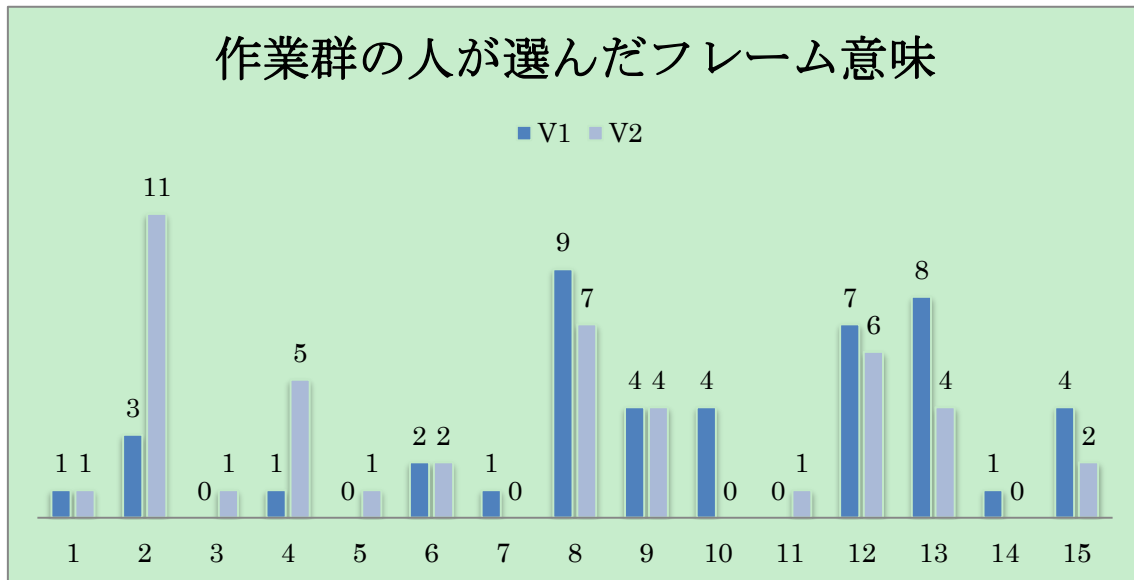


図 8：使用されたフレーム意味の頻度

4. 3 問い 2：どんな意味がどのように付けられるか

本節では、問い 2「どんな意味がどのように付けられるか」を見ていく．典型的例を挙げながら分析することで、意味づけプロセスの第一段階を概観する．

4. 3. 1 構文的意味の頻度

本実験から得られた複合動詞を、作業群が付けた意味や例文を元に、2. 3 節で紹介した野田（2011）がまとめた 13 個の構文的意味（表 2）に当てはめてみる．付けられた意味の回数は図 9 のようになる．野田（2011）の分類に当てはまる複合動詞がほとんどであるが、当てはまらないものもある．全ての複合動詞の構文的意味は附録 6 に示した．

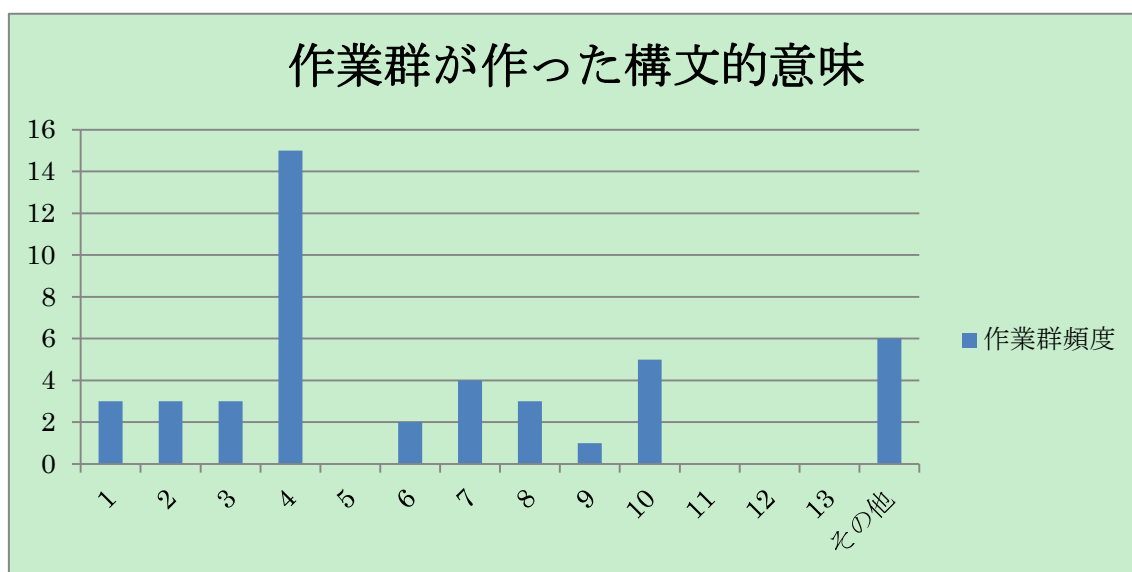


図 9 : 構文的意味の頻度

5, 11, 12, 13 番の構文的意味が一回でも付けられていなかった。
具体意味は次に表示する。

表 18 新しい複合動詞に適応できない構文的意味

構文的意味⑤:
変化主体が, 他者や, 他の物事からの働きかけによって生じる ある動き V1 の結果として, ある変化 V2 を実現する
構文的意味⑪:
複数の主体が, ある事態 V1 を, 同時もしくは交互に(ある期間)継続する V2
構文的意味⑫:
主体が, ある事態 V1 を始動する V2
構文的意味⑬:
主体が, ある事態 V1 を完了・完遂する V2

これに対して, 二点可能な原因が考えられる。

① 実験材料の問題

この 4 種類の構文的意味を組み合わせる単純語動詞がそもそも用意されていなかった。

② 構文的意味の問題

これらの構文的意味は全て野田 (2012) の構文的多義意味ネットワーク (図 3) の末端にある。従って, この意味の形成が一番困難なのかもしれない。

この原因は大変重要だと思われるが、現段階では真の原因を正当に評価することは困難であり、今後の課題としたい。

4. 3. 2 フレーム意味から構文的意味への組み合わせ過程

どのようなフレーム意味が組み合わせられて構文的意味が作られるかという過程を分析することで、意味づけ過程が分かると考えられる。そこで本節では、典型的なものを取り上げて、この過程を検討する。

一番多く付けられた構文的意味は 4 番の「変化主体が、ある行為もしくは状態変化 V1 の結果として、ある状態変化 V2 を実現する」であった。この構文的意味を持つ複合動詞は 15 個あり、その中の 10 個が語彙的複合動詞、5 個が統語的複合動詞である。さらに「語彙的複合動詞」において、「他動詞調和原則」に従うものと従わないものは、それぞれ 5 個ずつある。これらを表 19 にまとめた。

表 19：構文的意味 4 番が付けられた複合動詞

語彙的複合動詞	他動詞調和原則に従う	5	驚き苦しむ、驚き転ぶ、驚き下がる、聞き驚く、苦しみ転ぶ
	他動詞調和原則に従わない	5	転び下がる、望み苦しむ、苦しみ下がる、苦しみ頼る、転び頼る
統語的複合動詞	—	5	望み苦しむ、歩き苦しむ、聞こえ苦しむ、聞こえ頼る、下がり苦しむ

この構文的意味になった複合動詞の例として「望み苦しむ」がある。これは、2 人の異なる被験者が同じ構文的意味を付けている。また、単純動詞のフレーム意味から見ても、V1、V2 の両方について 2 被験者が同じフレーム意味としていると判断できるが、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に別々に所属しているとも判断できる。この例を分析して検討する。

➤ 「望み苦しむ」

V1：[1=人]が([2]を取得する | [2]になる)のを希望する

V2：([動作主]の働きかけで)[1=人]の感情が変化した状態になる

これは意味形成図 10 のように表示できる。

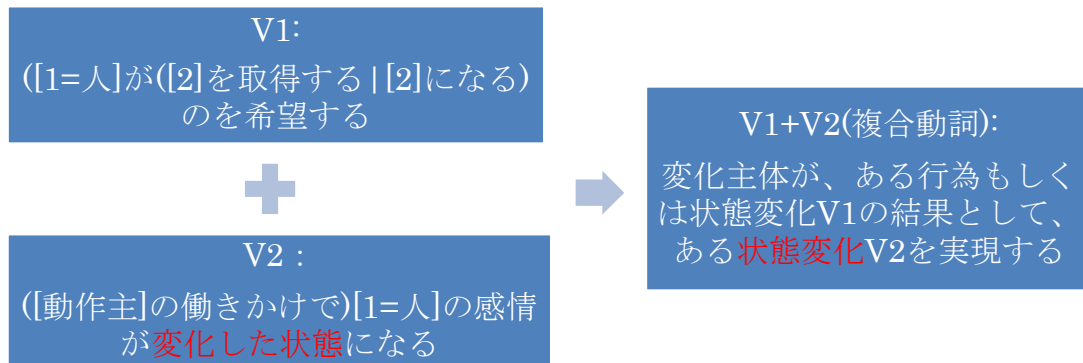


図 10 「望み苦しむ」の意味形成図

この例で、「望む」(V1)が行為や状態変化の意味が持たないが、変化主体([1])は希望する程度の変化をすることにより、「苦しむ」V2の状態変化を実現する。上記図 10 が示しているように、変化主体([1])が「望む」(V1)という希望する結果として「苦しむ」(V2)という感情上の状態変化を実現するので、「望み苦しむ」の意味を生じる過程が見えた。

他に、V1 は同じで V2 は異なる新しい複合動詞も同じ構文的意味を受容することが出来る。その例は、「統語的複合動詞」の「歩き苦しむ」と「語彙的複合動詞」の「転び頼る」の二つ新しい複合動詞である。

➤ 「歩き苦しむ」

V1 : ([動作主]の働きかけで)[1]が[経路]を移動して別の位置にいる状態になる

V2 : ([動作主]の働きかけで)[1=人]の感情が変化(した状態)になる

意味形成図は図 11 のように表示できる。この例では、V1 と V2 の意味は変わらず、因果関係を通して意味を組み合わせている。図示しているように、変化主体([1])が「歩く」(V1)という状態変化の結果として「苦しむ」(V2)という感情上の状態変化を実現するという、「歩き望む」の意味が生じる過程が見られた。

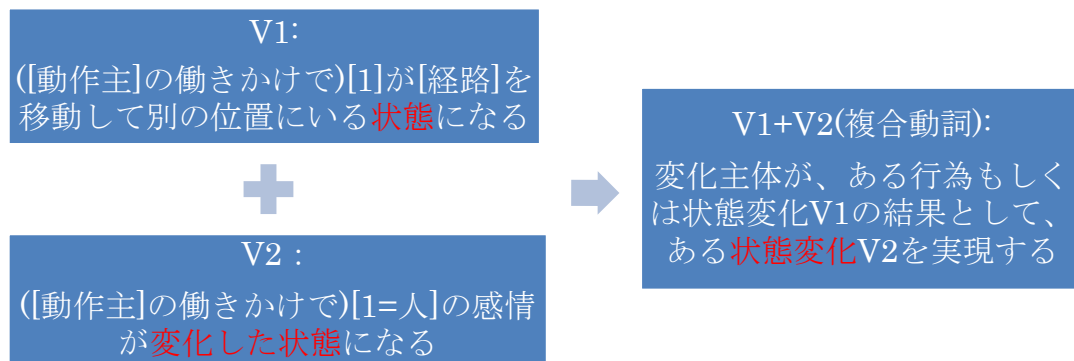


図 11 「歩き苦しむ」の意味形成図

➤ 「転び頼る」

V1 : ([動作主]の働きかけで)[1]が[経路]を移動して別の位置にいる状態になる

V2 : [1=人]が[2=人]に助けてもらふ為[2]に依存する

以下の意味形成図 12 を見て説明していきたい。この例で、「転ぶ」(V1)という状態変化の意味は他人に助けってもらふ原因まで変化し、「頼る」(V2)という意味が実現できる。図 12 が表示しているように、変化主体([1])が「転ぶ」(V1)という状態変化は原因で、[頼る](V2)という結果になることを通し、「転び頼る」の意味を生じる過程が見えた。

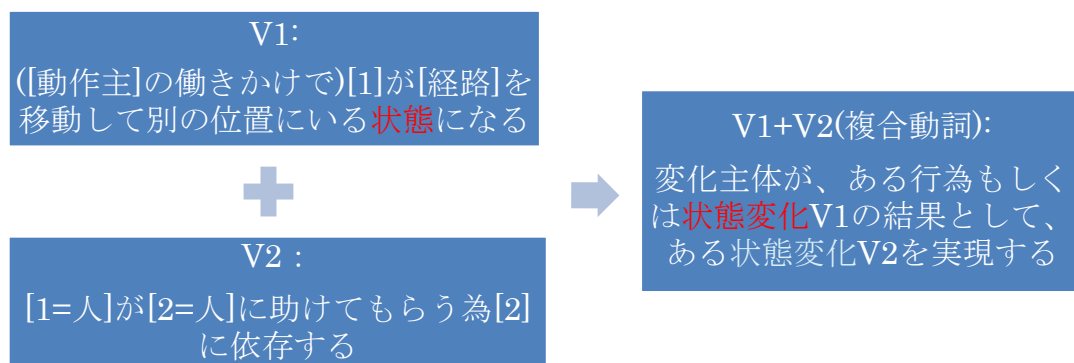


図 12 「転び頼る」の意味形成図

以上の「望み苦しむ」と「歩き苦しむ」の例で、V2 は同じで V1 は異なるフレーム意味を持つ。それでも、同じ構文的意味が作られた。「望み苦しむ」と「転び頼る」の例では、V1 と V2 の両方が異なるフレーム意味であるが、同じ構文的意味が作られる。同じ枠組みの意味形成図で説明できるため、ここで

は説明を 省略する.

以上の例の分析より, 新しい複合動詞を作る際に, 複合動詞として受容できる構文的意味の方が重視され, それに合うように単純動詞のフレーム意味が選択されるというプロセスがあることを示唆する.

4. 3. 3 表れなかった構文的意味の形成

図 9 の「その他」の項目に入ったのは野田 (2011) が抽出していない構文的意味である. その中の各複合動詞及びそれに付けられた意味と例文を表 20 その他の構文的意味に示す.

表 20 その他の構文的意味

複合動詞	意味	例文
転び望む	転げ回るほどの望みがある	おもちゃを前に子供が転び望む
転び苦しむ	転ぶぐらい苦しむこと	腹痛で転び苦しむ
頼り聞く	ウワサなどで信用できる話を聞く	あの人が最近頼り聞くんだ
下げ望む	悪いことを期待する	友人の未来を下げ望む
望み下がる	基本は「くい下がる」と同義, 望みを持ってくい下がること	将来の実現をめざして望み下がる
望み転ぶ	おねがいをかなえるためのおまじないのため転ぶ. 日本文化	太すぎたので望み転んだ

どのように組み合わせられているについて分析する. 表 20 の中に赤字で表示しているように, 各複合動詞に共通しているのが, V2 が意味の中心を占めことである. V1 がその中心意味を修飾することで, 複合動詞の意味を確定する.

- 「転び望む」, 「転び苦しむ」, 「転び望む」の V1 (「転び」) は形容詞の役割を取り, V2 の程度を制限する
- 「頼り聞く」の V1 (「頼る」) と「下げ望む」の V1 (「下げる」) は名詞の役割とし, V2 の対象になる.
- 「望み下がる」の V1 (「望み」) は名詞の役割とし, 「食い下がる」の対象になる. そして, 「くい」を省略され, 「望み下がる」になった.

このように、野田(2011)が分類した構文的意味以外の新しい複合動詞は、イレギュラーなように思うが、「V2 が意味の中心であり、V1 が V2 を修飾する」という法則性が見られる。これも、新しい複合動詞の意味を形成する一つの傾向と考えられる。

4. 4 問い 3：どういうふうに理解されるか

次に、意味づけプロセスの第二段階—作られた複合動詞はどういうふうに理解されるかを見ていく。

4. 4. 1 作業群と評価群による構文的意味の分布

作業群が作った 45 個の複合動詞に対して評価群の理解した意味を 4. 3. 1 節で述べたように、13 個の構文的意味に当てはめてみる。理解された意味の回数を作業群が付けた意味と比較するため、図 13 を作った。

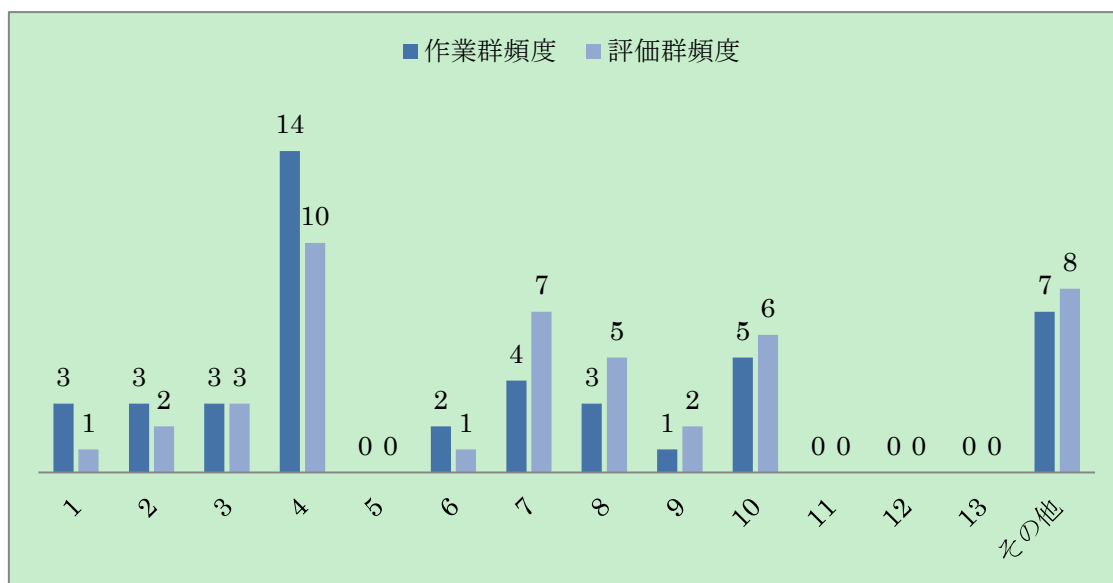


図 13 作業群と評価群が付けた意味の構文的意味の比較

この図 13 から、全体的には、各構文的意味において、評価群の理解は作業群が付けた意味と大きな差がない。特に、作業群が一度も付けなかった構文的意味、5, 11, 12, 13 番は、やはり評価群でも一回でも付けられていなかった。

そこから、もし、各作業群が付けた各構文的意味が、同じ分類として評価

群に理解されているなら、この現象になると考えた。この考えは確かめるため、作業群が作った複合動詞に対して評価群が判断した共感度を見ていく。

4. 4. 2 「共感度」から構文的意味の理解を見る

評価群に、作業群が作った複合動詞に対して、自分が理解した意味との共感度を 11 段階（0 割を含め）で答えてもらった。そして共感度が 4 割以下を共感度が低い、共感度 6 割以上を共感度が高いとした。共感度が低い新しい複合動詞複合動詞が 17 個あり、共感度が高い新しい複合動詞が 22 個（残った 6 個が共感度 5 割）ある。

作業群が付けた構文的意味と評価群が理解した構文的意味の一致率を見よう（具体データは付録 7 を参照）。45 個の複合動詞において、作業群が付けた構文的意味と同じ構文的意味として理解されたのは 30 個（67%）である。そして、共感度が高い複合動詞のうち 17 個（77%）が同じ構文的意味として理解された。

共感度と構文的意味の関係を見るために、共感度が高い複合動詞と低い複合動詞それぞれの構文的意味の分布を図 14 とエラー！参照元が見つかりません。に示した。これらの図より、以下の 2 点特徴が見られた。

- 野田（2011）が分類した構文的意味のカテゴリーでは、高い共感度を持つ複合動詞と低い共感度を持つカテゴリーに大きな違いはない。
- 「その他」のカテゴリーには低い共感度を持つ複合動詞しか存在しない。

この結果より、作業群が付けた構文的意味が同じ分類として評価群に理解されていても、共感度が高いわけではないことが分かった。また、新しい複合動詞に付けられた意味が既存複合動詞の 13 個の構文的意味に分類できない場合には、共感度が低く、作られた意味の通りに理解するのが困難であると考えられる。

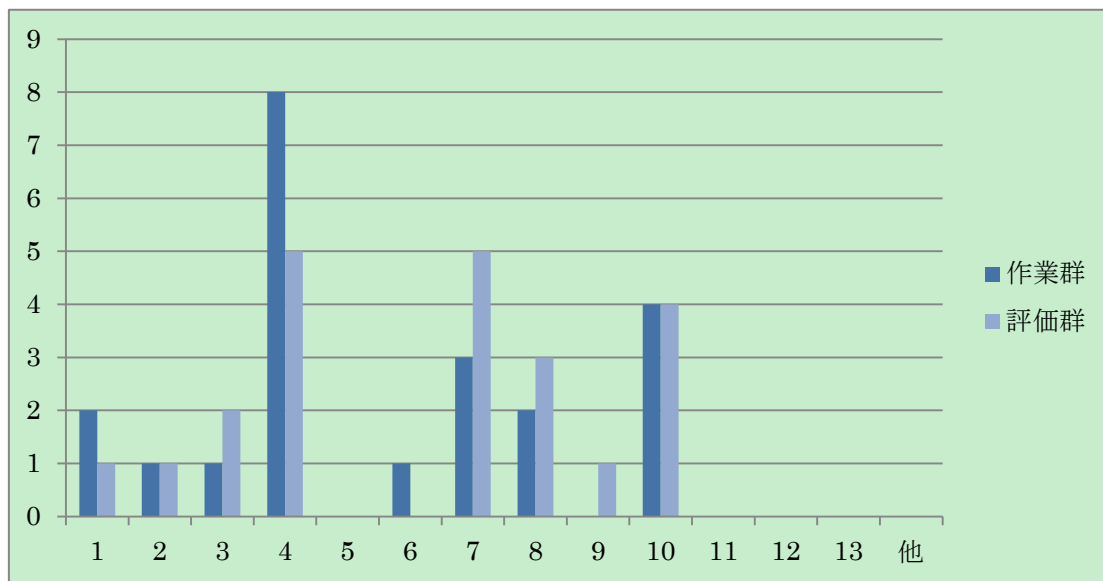


図 14 意味の共感度高い複合動詞の構文的意味分布

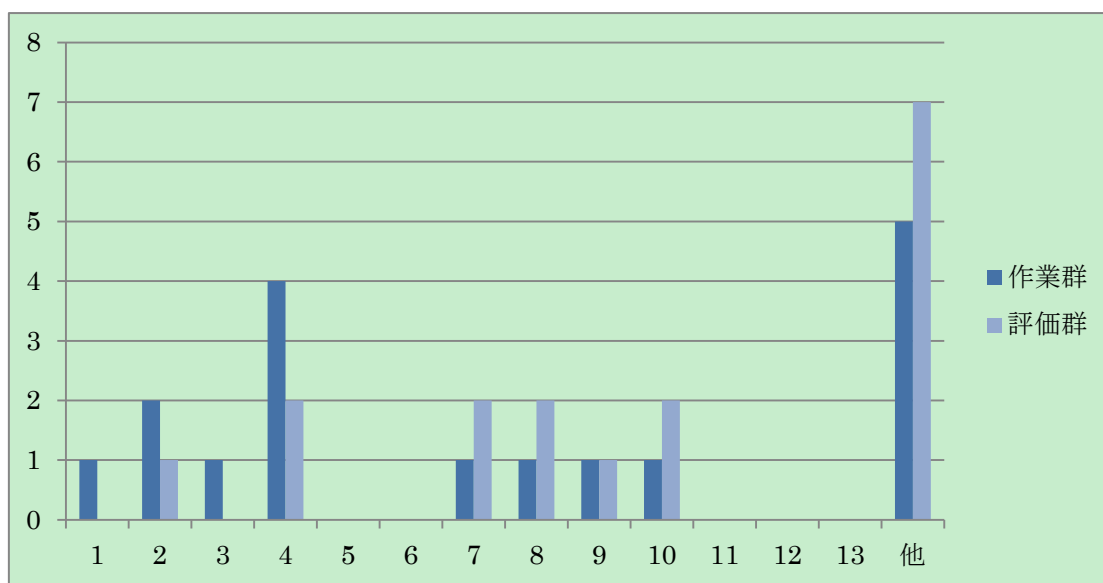


図 15 意味の共感度低い複合動詞の構文的意味分布

4. 4. 3 先行研究における制約など既存の知見との 関係

4. 2. 2 節で、新しく作られた複合動詞は「○原則」に従うものを従わないものが同じぐらい作られるということを見た。では、これらの理解のされ方に違いがあるだろうか。これを調べたものが表 21 である。この結果から、○原則に従う場合も従わない場合も、共感度は同程度だったと思われる。

表 21 他動詞調和原則と共感度の関係

		共感度高い	共感度低い	
語彙的複合動詞	他動詞調和原則に従う	11	8	58%
	他動詞調和原則に従わない	8	8	50%
統語的複合動詞	—	3	1	75%

第五章

結論

本論文の最後に、本研究のまとめと今後の検討課題を提示する。

5. 1 まとめ

本研究は日本語複合動詞を対象として、語形成における「意味付け」プロセスを探求する。ここで「意味づけ」プロセスは「意味形成」と「意味解釈」の二段階であるとしている。そして、本研究は、今まで多数の複合動詞を対象とする研究が採っている要素還元というトップダウンのアプローチではなく、ボトムアップのアプローチを採る。

それに従い、単純動詞から複合動詞を組み合わせる過程を直接に見る実験を設計した。実験では30名の日本語母語話者を集め、作業群（15名）に「意味形成」の役割を、評価群（15名）に「意味解釈」の役割を割り当てた。要するに、作業群は複合動詞を作り、評価群は複合動詞を理解及び評価する。作業群には8個の単純動詞を呈示し、単純動詞を組み合わせで一人3個の新しい複合動詞を作ってもらった。そして、得られた45個の新しい複合動詞に対し、意味や例文を被験者全員に付けてもらう。さらに、評価群の人々に11段階（0を含む）で作業群の人が付けた意味に対して、自分の理解との共感度を評価してもらう。

本稿では、「意味づけ」プロセスの二段階を解明するため、次の3つの問いを解けなければならないと考えた。

- どんな複合動詞が作られたか
- どんな意味がどのように付けられるか
- どういうふうに理解されるか

この3つの問いに答えるため、第二章で紹介した各先行研究から以下の分析のアイデアを提示した。

- 単純動詞：影山（1993）が提案した 3 種類に分類し、また、用いた単純動詞の意味単位を動詞シソーラスからフレーム意味の形を選んでおく。
- 複合動詞：統語的複合動詞と語彙的複合動詞（影山，1993）に分け、また、付けられた意味や例文に従い、野田（2011）が既存複合動詞からまとめた 13 個の構文的意味に当てはまる。

そして、実験から得られたデータの分析と考察から、3 つの問いに対しては以下のような答えになる。

- **問い 1：どんな複合動詞が作られたか**
 - 新しい複合動詞を作る際には、「語彙的複合動詞」のほうが作られやすいということが分かった。
 - 新しい語彙的複合動詞を作る際には、既存の語彙的複合動詞が従う「他動詞調和原則」に影響されないことが分かった。
- **問い 2：どんな意味がどのように付けられるか**
 - 以上の例の分析より、新しい複合動詞を作る際に、複合動詞として受容できる構文的意味の方が重視され、それに合うように単純動詞のフレーム意味が選択されるというプロセスがあることを示唆する。
 - 13 個の構文的意味に果てはまらない複合動詞の意味は、V2 が複合動詞の中心的意味で V1 がそれを修飾するという傾向があることが分かった。
 - 新しく作られた複合動詞が存在しない構文的意味は野田（2012）の構文的多義意味ネットワークの末端にあり、意味形成が困難であることが示唆される。しかしながら、その 4 種類の構文的意味を組み合わせる単純語動詞がそもそも選ばれなかった可能性も考えられる。
- **問い 3：どういうふう理解されるか**
 - 作業群が付けた構文的意味は、必ずしも同じ分類として評価群に理解されるわけではないことが分かった。
 - 新しい複合動詞に付けられた意味が既存複合動詞の 13 個の構文的意味に分類できる場合は共感度が高い場合も低い場合もあるが、そこに分類できない複合動詞の場合は、共感度が低く、作られた意味の通りに理解するのが困難であると考えられる。
 - 他動詞調和原則に従う複合動詞も従わないものも、共感度は同程度である。

5. 2 今後の課題

使用した単純語の意味解釈と複合動詞の意味解釈が同じ仕組みで説明するものではないので、研究者の内省による誤差が出る危険性も考えられる。単純動詞も、複合動詞も適応できるため、LCS アンケートを利用するのが期待されるが、一般人に分かれる程度に難しさを抑える方法まだ分からない。それで、今回 LCS アンケートで取れたデータの分析を深めて応用したい。評価群からもらった評価のデータまだまだ取りたい。

参考文献

- Ethnologue. (2005). Languages of the World,.
- Fillmore, Charles J., Paul Kay and Mary C. O'Connor. (1988). "Regularity and Idiomatical Constructions". *Language* 64, Vol.3, pp.501-538.
- Steven Pinker. (2009). 『思考する言語〈上〉—「ことばの意味」から人間性に迫る』. 日本放送出版協会.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. (2002). 語の仕組みと語形成. 研究者印刷株式会社.
- 伊藤たかね・杉岡洋子. (2002). 『語の仕組みと語形成』. 研究者印刷株式会社.
- 影山太郎. (1993). 文法と語形成. ひつじ書房.
- 影山太郎・由本陽子. (1997). 語形成と語彙概念構造. 研究者印刷株式会社.
- 影山太郎. (1993). 『文法と語形成』. ひつじ書房.
- 影山太郎. (1996). 『動詞意味論——言語と認知の接点』. くろしお出版.
- 影山太郎. (1996). 動詞意味論——言語と認知の接点. くろしお出版.
- 影山太郎. (1999). 『形態論と意味』. くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子. (1997). 『語形成と語彙概念構造』. 研究者印刷株式会社.
- 国立国語研究所 (編集). (1984). 『語彙の研究と教育』. 大蔵省印刷局.
- 小原京子. (2006). フレーム意味論と日本語フレームネット. *日本語学*, Vol.25. No.6. pp.40-52.
- 松田文子. (2002). 複合動詞研究の概観とその展望：日本語教育の視点からの考察. *言語文化と日本語教育 (お茶の水大学)*, 創刊号, 170-83.
- 松本曜. (1998). 日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ. *言語研究*, 114, 37-83.
- 浅尾仁彦. (2007). 意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞. *京都大学言語学研究*, Vol.26 pp.59-75.
- 竹内孔一, 乾健太郎, 竹内奈央, 藤田篤. (2008 年 3 月). 意味の包含関係に基づく動詞項構造の細分類発表番号: B5-2 学. 言語処理学会年次大会, . 東京大学.
- 竹内孔一, 乾健太郎, 竹内奈央, 藤田篤によって文科省科研費基盤研究(B)「語彙意味論に基づく言い換え計算機構の工学的実現と言い換え知識獲得への応用」(17300047, 代表: 乾健太郎). (2008). 動詞項構造シソーラス. 参照先: <http://vsearch.cl.cs.okayama-u.ac.jp/>
- 田中茂範・深谷昌弘. (1996). コトバの＜意味づけ論＞. 紀伊国屋書店.

- 田中茂範・深谷昌弘.(1996).『コトバの＜意味づけ論＞』. 紀伊国屋書店.
- 藤井聖子, 小原京子.(2003). フレーム意味論とフレームネット. 英語青年, Vol.14. No.6. pp.373-376.
- 白以然.(2007). 「韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の取得：日本語母語話者と意味領域の比較を中心に」. 日本語教育論集：世界の日本語教育(国際交流基金), 17, 79-91.
- 米山三明.(2001). 語彙・概念的な意味論の成立と展開. 著：辻幸夫, 『ことばの認知科学事典』 (pp.147-157). 大修館書店.

謝辞

本研究の全過程を通じ，懇切丁寧なるご指導，ご鞭撻のほどを頂きました北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科の橋本教授に深く感謝するとともに，心から御礼申し上げます．また，研究に対するご指導，ご審査頂きました北陸先端大学院大学の各教官の方々にお礼申し上げます．

ならびに，公私にわたり有益なご助言，ご意見，ご協力を頂きました橋本研究室の皆様に深く感謝致します．

付録 1 :

作業群に対する説明書

- ☆ 下記に表示されている 8 個の動詞を一つずつ読んで横のボックスにチェックを入れてください。

おどろ 驚 かす	☐	くる 苦しむ	☐	ころ 転ぶ	☐
さ 下がる	☐			き 聞こえる	☐
たよ 頼る	☐	ある 歩く	☐	のぞ 望む	☐

- ☆ 表示されている 8 個の動詞の中から異なる 2 個の動詞を選択して、新しい複合動詞を作ってください。
- 2 個以上の動詞をできるだけ自分が納得できるように組み合わせて、計 3 個複合動詞を作ってください。（異なる複合動詞を作るのに、同じ動詞を複数回使っても構いません。）
- 「言う」＋「出す」＝「言い出す」
- ☆ あなたが作った各複合動詞に対して意味を付けてください。

☆ あなたが作った各複合動詞を使った例文を作ってください。

☆ 新語に用いた動詞の意味とその意味に基づいた例文も記入してください。

単純語は複数の意味がある場合がありますが、ここでは新語を作る際に使用した意味を書いてください。

動詞V1＋動詞V2＝新語

新語①：

意味：

例文：

動詞V1

意味：

例文：

動詞V2

意味：

例文：

この新語①に対して、動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたか？

V1

どっちでもない

V2

そう思う理由を教えてください：

☆ この複合動詞及び用いた動詞に対する評価を記入してください（別紙）。

動詞V1＋動詞V2＝新語

新語②：
意味：
例文：

動詞V1
意味：
例文：

動詞V2
意味：
例文：

この新語②に対して、動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたか？		
V1	どっちでもない	V2
そう思う理由を教えてください：		

☆ 各複合動詞及び用いた動詞に対する評価を記入してください（別紙）.

動詞V1＋動詞V2＝新語

新語③：
意味：
例文：

動詞V1
意味：
例文：

動詞V2
意味：
例文：

この新語③に対して、動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたか？		
V1	どっちでもない	V2
そう思う理由を教えてください：		

☆ 各複合動詞及び用いた動詞に対する評価を記入してください（別紙）.

付録 2 :

評価群に対する実験説明書（1 例）

- ☆ 呈示された各複合動詞に対して意味を付けてください.
- ☆ そして、あなたが作った意味を使った例文を作ってください.

① 苦しみ歩く

意味 : _____

例文 : _____

② 望み聞こえる

意味 : _____

例文 : _____

③ 聞こえ頼る

意味 : _____

例文 : _____

- ✧ 以下呈示された意味や例文は，この先の単語を作ったヒトが着けたのです。
- ✧ それに対して自分の理解についてのアンケートを教えてください。

① 苦しみ歩く

意味：考え悶えながら歩く様子

例：彼はアイデアに行き詰まり庭を苦しみ歩いた。

(下記質問にもっとも当てはまるものをひとつ選んで下さい)

1. 自分の解釈が相手の説明と合致する割合はいくらですか？ 割
2. 上記の意味を説明されると，どう思いますか？
 - その意味のほうが自分がつけた意味より正しいだと思う
 - なるほどと思う
 - どちらでもない
 - その意味に違和感を感じる
 - そのような意味には取れないと思う

- ✧ この新語に用いた動詞の意味とその意味に基づいた例文も記入してください。

動詞V1：苦しむ

意味：

例文：

動詞V2：歩く

意味：

例文：

この新語に対して，動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたと思いますか？

V1

どっちでもない

V2

そう思う理由を教えてください：

② 望み聞こえる

意味：何か朗報が届いて実現しまう

例：彼の帰還が望み聞こえる。

(下記質問にもっとも当てはまるものをひとつ選んで下さい)

1. 自分の解釈が相手の説明と合致する割合はいくらですか？ 割
2. 上記の意味を説明されると、どう思いますか？
 - その意味のほうの方が自分がつけた意味より正しいだと思う
 - なるほどと思う
 - どちらでもない
 - その意味に違和感を感じる
 - そのような意味には取れないと思う

☆ この新語に用いた動詞の意味とその意味に基づいた例文も記入してください。

動詞V1：望む

意味：_____

例文：_____

動詞V2：聞こえる

意味：_____

例文：_____

この新語に対して、動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたと思いますか？

V1 _____ どっちでもない _____ V2

そう思う理由を教えてください：

③ 聞こえ頼る

意味：評判を聞きつけて当てにする．助けてもらおうと思う．

例：彼の武勇伝を聞こえ頼って遠方から来た．

(下記質問にもっとも当てはまるものをひとつ選んで下さい)

1. 自分の解釈が相手の説明と合致する割合はいくらですか？ 割
2. 上記の意味を説明されると，どう思いますか？
 - その意味のほう自分がつけた意味より正しいだと思う
 - なるほどと思う
 - どちらでもない
 - その意味に違和感を感じる
 - そのような意味には取れないと思う

◇ この新語に用いた動詞の意味とその意味に基づいた例文も記入してください．

動詞V1：聞こえる

意味：_____

例文：_____

動詞V2：頼る

意味：_____

例文：_____

この新語に対して，動詞V1とV2はどちらが中心として使いましたと思いますか？

V1 _____ どっちでもない _____ V2

そう思う理由を教えてください：

付録 3 :

予備実験で作業群と評価群が作った意味と例文

複合動詞	作業群が付けた意味	作業群が作った例	評価群が付けた意味
なげうつ	「なげる」+「うつ」= 「なげうつ」 意味: なにからなにまで自分でやる. ボールを投げることからボールを打つことまで全部自分でやる様から.	彼はとうとう会社の設立をなげうった.	すべて捨ててしま う
なげうつ	顧みず捨てさること.	私は自分の将来をなげうってでも彼女と一緒ににいたかった.	きえる
うもれきえる	「うもれる」+「きえる」で, ある物が何かに埋もれて消えてしまう様子を表す.	足跡が雪に埋もれ消えた.	驚いて泣いてしま う
かわりゆく	変化が続いている様子を表す	時代の様相はかわりゆくものだ	別の何かに埋れて消える
かきあそぶ	文章を書いたり, 絵を書いたりしながら遊ぶこと.	子どもに塗り絵をかきあそばせる.	泣いても泣いても足りない
なきあまる	まだまだ感動が足りない (ゆえに「泣く」に「余っている」)	先日ドラマを見たけれど, 私は泣き余った.	泣き合う
おどろきあます	「おどろく」+「あます」=「おどろきあます」 意味: 大いにおどろく. 驚きが余るほど驚く.	突然の UFO の襲来に主人公はおどろきあました	書くことで遊ぶ
かきけす	消えてなくなること.	電車の音で会話がかけされた.	変化していく

あそびかく	「あそぶ」+「かく」で、遊びながら何かを描く動作を表す。	妹とウサギの絵を遊び描いた。	遊んでいるうちに消える
なきあまる	蛇足のようにいつまでも泣き続ける様子	花子が泣き余るほどに皆は花子への関心を失っていった。	何かになげて、それをどこかにぶつける
おどろきなく	驚きすぎて泣くこと。	お化け屋敷でおどろきないた。	かいて、けす
あそびかわる	とても忙しくて遊ぶ余裕がない人に代わって、むしろたのしく遊ぶこと。	クリスマスは忙しい先輩に遊び代わった。	おどろくとももなく、平然としているよう様
あそびぎえる	「あそぶ」+「きえる」=あそびぎえる 意味:あそびすぎて疲れ果てる。	初めてのディズニーランドに子供はあそびぎえた	うもれて、みえなくなる
かわりゆく	ものごとが次々と変化するさま。	街の姿は時とともにかわりゆく。	十分以上に鳴くこと
おどろきなく	「おどろく」+「なく」で、何かに驚いて泣く動作を表す。	子どもが雷の音に驚き泣いた。	泣いて、大人の階段を昇り、成長する
かききえる	水桶に入った水溶性の異物がかき混ぜられることで消えてしまう様	その忍びは煙のようにかききえた。	何かをかいたり、描いたりして遊ぶ
なきかわる	泣いている人を見て、つられて泣いてしまうこと。	友達があまりにも泣き続けるので、なきかわってしまった。	変わって、新しいものに移っていく
けしかわる	すでにあるものをまったく消滅させて、(代わりに) 存在すること。	彼の存在は完全に消し替えられた。	遊び回って、以前の彼(彼女)でなくなり、自らの前から姿を消して疎遠になること

付録 4 :

LCS 推定のためのアンケート(一例)

新しい複合動詞「驚かし苦しむ」について、尋ねます。

このアンケートはある設問の回答に応じて次に回答する設問が指定される形となっています。次に回答すべき設問は選択肢の後に矢印の先に示されています。

注: X はある名詞, はある動詞を示しています。

設問 1

「X が/驚かし苦しんである」の形式が可能か？

- a. 可能 → 設問 9
- b. 不可能 → 設問 2

例えば: 動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「出す」なら, 「X が/出してある」となり, a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「働く」なら, 「X が/働いてある」となり, b が選ばれる。

設問 2

「X を驚かし苦しむ」の形式が可能か？

- a. 可能 → 設問 4
- b. 不可能 → 設問 3

例えば: 動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「喜ぶ」なら, 「X を喜ぶ」となり, a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「働く」なら, 「X を働く」となり, b が選ばれる。

設問 3

「驚かし苦しんだ後, 今驚かし苦しんでいる」の形式の表現は当然のことを述べているか？

- a. はい → 設問 11

- b. いいえ → 設問 7
- c. その形式自体が不可能 → 設問 7

例えば:動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「覚える」なら、「覚えた後、今覚えている」となり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「働く」なら、「働いた後、今働いている」となり、b が選ばれる。

設問 4

移動の経路や起点を「X を」の形式で表現可能か？

- a. 可能 → 設問 5
- b. 不可能 → 設問 6

例えば:動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「泳ぐ」なら、「X を」の形式で移動起点を表現することとなり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「喜ぶ」なら、「X を」の形式で移動起点を表現することとなり、b が選ばれる。

設問 5

「X を驚かし苦しむ」の形式を「X から驚かし苦しむ」の形式に変更可能か？

- a. 可能 → 設問 12
- b. 不可能 → 設問 8

例えば:動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「出る」なら、「X を出る」の形式を「X から出る」の形式に変形することとなり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「泳ぐ」なら、「X を泳ぐ」の形式を「X から泳ぐ」の形式に変形することとなり、b が選ばれる。

設問 6

「X 分で Y を驚かし苦しんだ」の形式が可能か？可能な場合、その解釈は動作や行為の完了かそれとも開始か？

- a. すべての Y で完了解釈で可能 → 設問 11
- b. 一部の Y で完了解釈で可能 → 設問 7
- c. 開始解釈で可能 → 設問 7
- d. 不可能 → 設問 7

例えば:動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「歌う」なら、「X 分で Y を歌った」となり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「飲む」なら、「X 分で Y を飲んだ」となり, b が選ばれる.

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「好む」なら、「X 分で Y を好む」となり, c が選ばれる.

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「存じる」なら、「X 分で Y を存じる」となり, d が選ばれる.

設問 7

「驚かし苦しむ」と「驚かし苦しんでいる」の形式について,

- a. 前者は後者と異なり未来の事態を表す → 設問 12
- b. 共に現在の事態を表す, または「～している」の形式がそもそも不可能 → 設問 12

例えば: 動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「鳴る」なら, 「なる」と「鳴っている」となり, a が選ばれる.

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「燃える」なら, 「燃える」と「燃えている」となり, b が選ばれる.

設問 8

移動の着点を「X に」の形式で表現可能か?

- a. 可能 → 設問 12
- b. 不可能 → 設問 12

例えば: 動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「戻る」なら, 「X に」の形式で移動の着点を表現可能となり, a が選ばれる.

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「越える」なら, 「X に」の形式で移動の着点を表現可能となり, b が選ばれる.

設問 9

「驚かし苦しむ」の表す行為や活動が対象の物理的移動, その所有権や情報の移動を含むか?

- a. 物理的移動を含む → 設問 10
- b. 所有権や情報の移動を含む → 設問 12
- c. 移動はない → 設問 11

例えば: 動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「巻く」なら, 物理的移動を含む, a が選ばれる.

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「消す」なら、情報の移動を含む、b が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「焼く」なら、移動はない、a が選ばれる。

設問 10

「X 分間 Y を驚かし苦しむている」の形式が X 分間の間ずっと Y が物理的に移動し続けていると解釈可能か？

- a. 可能 → 設問 12
- b. 不可能 → 設問 12

例えば：動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「巻く」なら、「X 分間 Y を巻いている」となり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「つなぐ」なら、「X 分間 Y をつないている」となり、b が選ばれる。

設問 11

「驚かし苦しむ」の表す行為や活動により対象の変化はあるか？

- a. 変化がある → 設問 12
- b. 変化がない → 設問 12

例えば：動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「割れる」なら、対象の変化はあり、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「見つかる」なら、対象の変化はない、b が選ばれる。

設問 12

「一生懸命」「いやいや」のような意志に関する副詞を付けた文が可能か？

- a. 可能
- b. 不可能

例えば：動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「働く」なら、a が選ばれる。

動詞の部分が「驚かし苦しむ」の代わりに「燃える」なら、b が選ばれる。

付録 5 :

用いた単純動詞に関するフレーム意味

単純動詞	例文	フレーム意味
驚かす	その事件が世間を驚かす	([動作主]の働きかけで) [1=人]の感情が 変化した状態 になる
驚かす	彼女を驚かす	([動作主]の働きかけで) [1=人]の感情が 変化した状態 になる
苦しむ	彼が喘息に苦しむ	([動作主]の働きかけで) [1=人]の感情が 変化した状態 になる
苦しむ	彼女が解読に苦しむ	([動作主]の働きかけで) [1=人]の感情が 変化した状態 になる
苦しむ	彼の行為は理解に苦しむ	[1=対象]がそれに対して[2=動作]をするの が難しい状態 である
転ぶ	ボールが坂道を転ぶ	([動作主]の働きかけで) [1]が[経路]を移 動して別の位置にいる状態 になる
転ぶ	芸者が転ぶ	([動作主]の働きかけで) [1]が[2]に服従す る関係にある状態 になる
転ぶ	子供が転ぶ	([動作主]の働きかけで) [1=人]の姿勢が 変化する
転ぶ	彼が金に転ぶ	([動作主]の働きかけで) [1=人]の感情が 変化した状態 になる
転ぶ	キリシタンが転ぶ	([動作主]の働きかけで) [1]の考え方や思 想が改められた状態 になる
下がる	侍従が御前を下がる	([動作主]の働きかけで) [1]が[起点]にい ない状態 になる
下がる	乗客が白線内に下がる	([動作主]の働きかけで) [1]が[境界]を越 えた位置 または [範囲]の内側の位置に いる状態 になる
下がる	四条通りを下がる	([動作主]の働きかけで) [1]が[経路]を移 動して別の位置にいる状態 になる
下がる	地盤が下がる	([動作主]の働きかけで) [1]が[着点]にい る状態 になる

下がる	暖簾が入り口に下がる	([動作主]の働きかけで) [1]が[2]に付着した状態 になる
下がる	洋服が妹に下がる	([動作主]の働きかけで) ([1]が[2]に提供されて)[1]が[2=人]のもとにある状態 になる
下がる	成績が下がる	([動作主]の働きかけで) [1]の程度や水準が低い状態 になる
下がる	音質が下がる	([動作主]の働きかけで) [1]の程度や水準が低い状態 になる
下がる	値段が1000円以下に下がる	([動作主]の働きかけで) [1]の値段が低い状態 になる
下がる	気温が下がる	([動作主]の働きかけで) [1]の温度が低い状態 になる
下がる	年代が下がる	([動作主]の働きかけで) [1=季節, 年代]が推移した状態 になる
望む	世間が才能を望む	[1=人]が([2]を取得する [2]になる)のを希望する
望む	父が出世を望む	[1=人]が([2]を取得する [2]になる)のを希望する
望む	頂上が峰を望む	[1]から[2]が見える位置にある状態 である
聞こえる	借金が母に聞こえる	([動作主]の働きかけで) ([1]が表す情報が[2]に伝えられて)[1]が[2=人]のもとにある状態 になる
聞こえる	父が世に聞こえる	([動作主]の働きかけで) [1]が社会的に成功した状態 になる
聞こえる	言い方が大げさに聞こえる	([動作主]の働きかけで) ([1]が[2]を認識することで) [1]の頭の中で[2]が定まった状態 になる
聞こえる	歌声が聞こえる	[1]が[2]について聴覚を用いて知覚動作を行う
頼る	知人を頼る	[1=人]が[2=人]に助けをもらう為 [2]に依存する
頼る	親を頼る	[1=人]が[2=人]に助けをもらう為 [2]に依存する
頼る	息子が生活費を親に頼る	[1=人]が[2=人]に助けをもらう為 [2]に

		依存する
歩く	学生が通学路を歩く	([動作主]の働きかけで) [1]が[経路]を移動して別の位置にいる状態 になる
歩く	バッターが一塁に歩く	([動作主]の働きかけで) [1]が[着点]にいる状態 になる
歩く	私が観光地を歩く	[1]が[場所]の内部をあちこち移動する
歩く	彼が困難な道を歩く	[1]が生活する
聞く	生徒たちが講義を先生から聞く	([動作主]の働きかけで) ([2]が[1=情報]を入手して)[1]が[2=人]のもとにある状態 になる
聞く	生徒たちが講義を先生から聞く	([動作主]の働きかけで) ([2]が[1=情報]を入手して)[1]が[2=人]のもとにある状態 になる
聞く	先生の言うことを聞く	([動作主]の働きかけで) [1=人]の[2=願い, 頼みなど]が人に受け入れられた状態 になる
聞く	ワインを聞く	[1]が[2]についての情報を得ようと 試しの動作を行う
聞く	香りを聞く	[1]が[2]について嗅覚を用いて知覚動作を行う
聞く	道を警察に聞く	[1=人]が[2=人]から情報を取得する為 [2]に質問する
驚く	赤ちゃんが物音に驚く	

付録 6 :

作業群が複合動詞に付けた構文的意味

構文的意味①: 苦しみ歩く, 転び歩く, 転び下がる

移動主体が, ある動き V1 を伴い, ある移動 V2 を実現する

構文的意味②: 頼り歩く(2 回), 驚かし歩く

移動主体が, なんらかの対象に対する働きかけとしてのある行為 V1 を, 反復的もしくは(長期)継続的に伴い, ある移動 V2 を実現する

構文的意味③: 聞こえ歩く, 歩き転ぶ, 聞こえ望む

移動主体が, ある行為もしくは状態変化 V1 を伴い, かつその行為もしくは状態変化 V1 の結果として, ある移動 V2 を実現する

構文的意味④: 下がり苦しむ, 驚き下がる, 歩き苦しむ, 苦しみ下がる, 転び頼る, 驚き苦しむ, 望み苦しむ, 聞こえ苦しむ, 転び下がる, 聞こえ頼る, 望み苦しむ, 驚き転ぶ, 苦しみ転ぶ, 聞き驚く

変化主体が, ある行為もしくは状態変化 V1 の結果として, ある状態変化 V2 を実現する

構文的意味⑥: 頼り望む, 聞き望む

使役行為者が, ある行為 V1 により対象に働きかけ, その結果として対象にある使役行為 V2 を実現させる

構文的意味⑦: 苦しみ歩く(2 回), 苦しみ望む

主体が, ほぼ同時に, ある事態 V1 及び別の事態 V2 を実現する

構文的意味⑧: 望み頼る, 頼り下がる, 驚か下がる

主体が, ある事態 V1 を, 継続的であり程度性・徹底性が高い事態 V2 として実現する

構文的意味⑨: 望み転ぶ

主体が, 本来ならば実現はずの, もしくは実現すべきある事態 V1 を, 未遂・不成立に終える V2

構文的意味⑩: 望み歩く, 苦しみ歩く, 頼り歩く(2 回), 転び歩く

主体が, ある事態 V1 を, ある期間もしくは習慣的に継続する V2

他の複合動詞: 転び望む, 転び苦しむ, 頼り聞く, 望み下がる, 苦しみ頼る, 下げ望む, 望み転ぶ

付録 7 :

複合動詞に対する作業群と評価群が付けた意味の対比表

— ID	単語	共感度	作業群構文	評価群構文
501	転び望む	0 割合致		
502	下がり苦しむ	6 割合致	4	9
503	聞こえ歩く	0 割合致	3	
701	驚き下がる	10 割合致	4	8
702	歩き苦しむ	5 割合致	4	4
703	望み頼る	3 割合致	8	8
111	転び苦しむ	4 割合致		4
112	頼り歩く	2 割合致	2	10
113	望み歩く	8 割合致	10	10
131	歩き転ぶ	9 割合致	3	3
132	苦しみ下がる	0 割合致	4	4
133	頼り望む	10 割合致	6	7
151	苦しみ歩く	6 割合致	1	3
152	聞き望む	5 割合致	6	6
153	転び頼る	3 割合致	4	
171	頼り聞く	4 割合致		
172	苦しみ歩く	10 割合致	10	10
173	頼り歩く	8 割合致	10	10
191	驚き苦しむ	7 割合致	4	4
192	望み下がる	3 割合致		
193	頼り歩く	10 割合致	10	10
211	頼り下がる	8 割合致	8	8
212	望み苦しむ	9 割合致	4	4
213	転び歩く	2 割合致	10	10
231	苦しみ頼る	7 割合致		7
232	驚か下がる	10 割合致	8	8
233	聞こえ望む	5 割合致	3	3

251	苦しみ歩く	7 割合致	7	7
252	聞こえ苦しむ	10 割合致	4	4
253	望み転ぶ	0 割合致	9	
271	苦しみ歩く	2 割合致	7	7
272	苦しみ望む	9 割合致	7	7
273	転び下がる	5 割合致	4	4
291	転び歩く	2 割合致	1	
292	聞こえ頼る	9 割合致	4	4
293	望み苦しむ	5 割合致	4	4
311	頼り歩く	6 割合致	7	7
312	驚き転ぶ	10 割合致	4	4
313	下げ望む	5 割合致	?	
331	驚かし歩く	4 割合致	2	2
332	望み転ぶ	0 割合致		9
333	転び下がる	7 割合致	1	1
351	苦しみ転ぶ	0 割合致	4	8
352	頼り歩く	10 割合致	2	2
353	聞き驚く	0 割合致	4	7